

Title	言語文化の比較と交流(8) (冊子)
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85198
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

言語文化共同研究プロジェクト 2020

言語文化の比較と交流 8

田 中 智 行
中 直 一
中 村 綾 乃
三 浦 あゆみ
渡 辺 貴規子

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

まえがき

本共同研究プロジェクトは、大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻に所属する教員と、同専攻博士後期課程に在籍する大学院生をメンバーとして2013年度に発足した。8年目となる2020年度は、昨年度のメンバーに新たに渡辺貴規子氏が加わり、教員6名で研究を行った結果、5名の論文が掲載に至った。

「言語文化の比較と交流」という名称が示すように、本プロジェクトは、専門分野を異にする研究者が大きな枠組みの中で緩やかに繋がり、それぞれのテーマを追究しつつも、各自の研究の底流をなす「比較と交流」という視点から、言語文化学に寄与することを目的としている。

本書は、その共同研究の成果を集成したものである。本共同研究プロジェクトが、言語文化学の発展に一掬なりとも貢献しうるよう、来年度以降も続行されることを期待したい。

田 中 智 行
中 直 一
中 村 綾 乃
平 山 晃 司
三 浦 あゆみ
渡 辺 貴規子

言語文化共同研究プロジェクト2020

言語文化の比較と交流 8

目 次

まえがき

語り直される場面

——『金瓶梅』における作中人物の回顧行為をめぐる試論—— 田中智行 1

第一次世界大戦と日本のドイツ語学習雑誌

—『獨逸語學雑誌』に於けるドイツ観の変遷— 中 直一 11

ドイツ革命とゾルフ

——帝国の終焉から新生共和国へ—— 中村綾乃 21

Translation effects on the use of impersonal verbs *irken* and *uggen* in *An Alphabet of Tales* Ayumi Miura 35

明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記 渡辺貴規子 43

語り直される場面 ——『金瓶梅』における作中人物の回顧行為をめぐる試論——

田中智行

はじめに

中国の白話小説に口頭芸能の上演風景を連想させる定型表現がみられることは、広く知られている。「説話的（講釈師よ）」と聴衆が呼びかける体裁の発問や、読者に「看官（お聞きの皆様）」と語りかけつつ施される語り手の説明、また章回形式の作品における「且聴下回分解（つづきは次回の説きあかしをお聞きあれ）」といった締め文句、対句仕立ての描写文など、こうした箇所はかつて、白話小説というジャンルの起源が語り物であったことに結びつけて説明されることが多かった。鈴木陽一氏は「中国小説の語りにおける外形的な特色そのものを、すなわち読むテキストにおける語りの特色として分析することから始めなければならない」¹との立場から従来のそうしたとらえかたを批判し、たとえば『初刻拍案驚奇』にみえる「看官一説話的」について、「敢えて芸能の語りを残したと考えるより、語りの複雑さを獲得するために、敢えて芸能の語りを取り込んだものと見た方がよい」と論じている²。

仮想の講釈師が語りかける形式は、白話長篇小説にあっても長く命脈を保った。魯德才氏は、清代の『紅樓夢』にもそのような語りのモデルが残存していることを指摘し、作者は一人称の語り手を石に担わせようと一度は考えたものの、政治や文化、多くの人物の込み入った心理など、限りある視角ではとらえきれぬ対象を描くためには、伝統的な講釈師の口調や型による全知全能の語り手に助けを求めざるを得なかったのだろうと述べている³。

さて、こうした小説を読み進める読者と作中の語り手とは、それぞれ聴衆と講釈師の立場に身を置いて、擬似的な語りの場に参画することになる。中里見敬氏はいわゆる話本小説における物語行為の諸相を論じ、『六十家小説』から『豆棚閑話』までを通観するなかで、『金瓶梅』第三十四回にみえる物語行為に着目している。既存の話柄を西門慶が自らの裁いた事件として語る場面であるが、語り手が聴き手に向けて直接語るのではなく、作中人物間の物語行為として描かれ「物語の中の物語」を形成する点に、中里見氏は「『金瓶梅詞話』の特異な位相」⁴を見出だしている。口頭芸能に直接の起源をもたぬ個人創作の白話長篇として早い時期の作品である『金瓶梅』は、「看官」の使用などについては従前作を引きついでいるものの⁵、作中人物の歌う俗曲がその心理状態の描写となっている点——パトリック・ハナン氏はこれを「革命的な前進」と評する⁶——など、作中人物の口にする言葉に目を向けることで、それまでにない小説表現が浮き彫りとなるのは興味深い。

本稿で中心的に取り上げるのもやはり『金瓶梅』の作中人物が語る場面であるが、第三十四回で語られるのが『金瓶梅』の本筋にほぼ関係しない挿話であるのに対し、本稿では、作中で既に描かれた場面の顛末をその場にいた作中人物（当事者ないし目撃者）が第三者に向かって改めて語り聞かせる場面、すなわち作中人物が既出場面を回顧して語る場面に注目したい。このばあい作者は、一度は語り手を通して語った内容を、作中人物の誰かの口を借りて語り直すことになる。そのとき、作中人物の語る内容と、すでに語り手によって語られた内容とのあいだには、どのような関係がみられるのだろうか。

この問題に注目するのは、作品内における回顧行為の様相から、作者の物語行為観をうかがえるのではないかと考えてのことである。というのも、語り手が初めてその出来事を物語

¹ 鈴木陽一「明清の短編小説における「語り」について——「三言」、「二拍」を中心に——」（『中国古典小説研究』第7号、2002）、41頁。

² 同前、47頁。

³ 魯德才『中国古代白話小説芸術形態導論』（南開大学出版社、2013）、131-134頁。

⁴ 中里見敬『中国小説の物語論的研究』（汲古書院、1996）、48頁。

⁵ 寺村政男「『金瓶梅詞話』における作者介入文——看官聴説考——」（『中国文学研究』第2期）、19-31頁。

⁶ Patrick Hanan, “Sources of the *Chin P’ing Mei*”, *Asia Major*, n.s., 10.1 (1963), p. 67.

った際と異なり、作中人物の回顧を読む時点においては、読者はそこで何が語られるべきかをあらかじめ知っている。かつ、作中人物Aが作中人物Bに対して回顧をおこなうときAは、Bに語って聞かせるのにふさわしい（とAが考える）体裁となるように話を加工しつつ語ることになる。出来事そのものは読者既知のものであるため、Bに物語るにあたってAがどのような加工を施しているかを、読者は知ることができる。つまりここでは、如何に語るかが小説表現上の焦点たりうる。そして実際に加工をおこなうのはAの口を借りて語る作者なのであるから、作中人物が回顧に際して事態に施す加工に、語り手を介して作者が小説世界を描く際の操作と通底する点が見出だされることは、十分に予想できよう。そうした加工ないし操作の背景に、語るという行為に対する作者の認識をうかがうことはできないだろうか。

物語内の出来事を語り直す作中人物に着目して、作者が物語行為をいかなる営みとしてとらえていたのか、その一端をさぐり、ひいてはそうした物語行為観が『金瓶梅』そのものの語られかたにもかかわっていることを示すのが、本稿のねらいである。

1 『西遊記』の場合

まず対照例として、『金瓶梅』に成立年代が比較的ちかく、かつ同じ白話長篇小説である『西遊記』における回顧行為を取り上げたい。この作品には「看官」と「説話的」の掛け合いこそ見られないものの、盛り場での芸能に起源をもつ作品であることは言うまでもない⁷。

『西遊記』第五十八回は、孫悟空が自分そっくりに化けたニセ悟空と戦う段の結末が語られる回である。ニセ悟空は孫悟空と瓜二つであるばかりでなく実力も伯仲しており、さらには兩名の頭に嵌まった禁箍までも、唐僧のまじないによって兩名の頭をひとしく締め上げるという具合なので、観音にも唐僧にもふたりの真偽を見分けることはできない。そのため二人は天界・冥界・西天と駆け回って事情を説明し、偽物——とうぜん二人とも相手が偽物だと言い張る——を倒す助力を求めることになる。まず天界に赴いて悟空が語るその顛末を引用してみる。

「おれさまはな、唐僧を守って西天取經の旅の途中、賊を打ち殺してしまったために、師匠に追放された。そこで普陀山に行って観音に訴えているあいだ、なんと、この化けものがおれさまそっくりの姿に化けて師匠をなぐり倒し、荷物を盗んでいったのだ。沙悟浄が荷物をとり返しに花果山に行ったところ、こいつめ、おれさまの古巢を占領している。あわてて普陀山の観音のもとに飛んでいったら、おれさま、ちゃんと蓮台のもとに立っている」（中野美代子訳）⁸

このあと孫悟空はさらに冥界と西天において二度、同様の報告をしている。もちろん経緯の骨子は変わらないのだが、文章は全体的に変えてあり、とくに西天で釈迦如来に経緯を説明する際には、かなり丁寧な文体となっている。たとえば上に引いた報告のうち、「なんと……」の一文は、原文だと「不想這妖精，幾時就變作我的模樣，打倒唐僧，搶去包袱」⁹だが、ここは釈迦如来への報告だと「不期這個妖精假變弟子声音相貌，將師父打倒，把行李搶去」になっている。一人称の「我」は「弟子」にかわり、「模樣」は「声音相貌」となり、「唐僧」を「師父」と呼び変え、「打倒」「搶去」の句も処置句にあらためるなど、いちいちもったいぶらせている。語られる内容をもても、賊を打ち殺したという箇所は、天界ではあっさり「在路上打殺賊徒」と言っているところ、如来に殺生をとがめられるのを警戒して先回りし「委是弟子二次打傷幾個」と弁解がましい言いかたをするなど、細かな差がつけられている。

上の引用箇所の訳者でもある中野氏は、この繰り返される報告が清代の『西遊真詮』では省略されていることを指摘して、それが経過を熟知している読み手の気持ちを察した改編で

⁷ 『西遊記』の成立史については太田辰夫『西遊記の研究』（研文出版、1984）、磯部彰『西遊記』形成史の研究』（創文社、1993）などを参照。

⁸ 中野美代子訳『西遊記（六）』（岩波文庫、2005 改版）、319-320 頁。

⁹ 『西遊記』の本文は李卓吾評本の排印本（上海古籍出版社、1993）による。

ある反面、ニセ悟空を見分けてほしいといわれた神仏にしてみれば「悟空にはじめから終わりまで説明してもらわなければならない。読み手が退屈しようがしまいが、知ったことではないのである」¹⁰と述べ、さらに以下のように述べている。

出来事をくり返し語るかれの雄弁も、じっと耳を傾けていると、微妙なところでシーケンスの捩れがあつたりして面白いのである。これを、くり返しが多いとて省略した清刊本『西遊真詮』とくらべてみると、くり返しや捩れの部分を削ぎ取った後者の「合理性」が、いかに味気ないものであるか、わかるであろう¹¹。

たしかに、冗長とも思えるこのような報告の反復も、読者にそのわずかな差を楽しませるため置かれていると考えるならば理解しやすい。孫悟空が天将や冥土の役人、釈迦如来相手にそれぞれどのように報告するのか、その微妙な違いを楽しむことが、ここでは読者に求められているのだと思われる。

ただし、その違いとはあくまで聞き手に応じた表現の差であって、孫悟空が事実関係そのものを相手によって三様に描き出しているわけでないことは確認しておきたい。孫悟空はつねに真実を語っている。語られる内容そのものは読者のよく知った筋をなぞるものであって、孫悟空が意図的にそこへ嘘を紛れ込ますとか、読者が思ってもみなかった事態の解釈を披歴するといった可能性は想定されていない。同じ筋を異なる言い回しでたどるからこそ、同じ曲を異なる演奏家で聴き比べるときのように、表現上の微妙な違いが浮き上がってくるのである。

2 『金瓶梅』の場合

2-A 玳安の語り

『金瓶梅』の場合にも当然ながら、すでに描かれた場面が居合わせた人物の口から語り直される場面は多い。まずは上に見た孫悟空同様、事実を正確に報告する語りの例を見てみたい。

この作品の主人公・西門慶は第二十回末尾、急に訪問することになった廓で、なじみの妓女が別の客を取っているところを目撃し、怒って大暴れする。回が改まって第二十一回冒頭、帰宅した西門慶は、正妻の呉月娘が夫の身を念じて天に祈る姿を見かけ、感動して仲直りする。さて翌日、第三夫人の孟玉楼と第五夫人の潘金蓮は事態をつかむべく情報収集に励み、前夜主人と行をともししていた小者の玳安に話を聞く。

玳安はすべてを話した。常時節の家で茶の集まりがあったことから、早くお開きになり、応二さんと謝さんを語らっていっしょに李家へおもむいたこと。遣り手婆が、李桂姐は母方の五番目のおばさんの家に誕生祝いに行っており不在ですと答えたこと。はからずもその後、父様が手を洗いに奥へ立ったところ、女郎が南方出と酒を飲んでいて、それで出てこなかったのだとわかったこと。父様が腹を立てて、有無をいわず私らに、淫婦の家の門、窓、戸、壁を、おもいきりぶち壊させたこと。南方出と女郎は門番小屋に押しこめといて聞かなかったこと。応二さんたちが何度も引き止めたおかげで、父様は怒りながら馬で雪道をそろそろかえたこと。こんどまた淫婦めに思い知らせてやると、道中も息巻いていたこと——。（玳安悉把在常時節家会茶，起散的早，邀応二爹和謝爹，同到李家。他鴿子回説不在家，往五姨媽家做生日去了。不想落後爹淨手到後辺，看見粉頭和一個蛮子吃酒不出來，爹就惱了。不由分説，叫俺衆人，把淫婦家門窓戸壁，儘力打了一頓，只要把蛮子粉頭墩鎖在門上。多虧応二爹衆人，再三勸住，爹使性步馬回家。路上發狠，到明日還要擺布淫婦哩¹²）。

¹⁰ 中野美代子『孫悟空との対話』（日本放送出版協会、1993）、127頁。

¹¹ 同前、132頁。

¹² 引用は『金瓶梅詞話』影印本（大安、1963）による。

直接話法で訳さなかったのは、この箇所原文が直接話法とも間接話法ともつかぬ文章で書かれているからである。太田辰夫氏は原文で玳安の語りはじめに置かれた「悉把」の「把」について、以下のように注釈している。

把 処置句。……を。ここの文章は破格で、《把》によって提前される賓語も判然とせず、また動詞もない。意味上からは《把》は《擺布淫婦哩》までかかり、以上のことを話したということである。このような破格の語法は旧小説に時々みえるし、またこの箇所、崇禎本その他二三のテキストでも改めていないことは頗る興味がある¹³。

いま『金瓶梅』で「悉把」から導かれる同様の発話をさがすと、もっとも長いのは第六十八回(13b)、林太太という人物について妓女の鄭愛月が西門慶に論評する箇所で、「把」のかかる発話内容はじつに一八八字に及ぶ。文体も直接話法のセリフと選ぶところがないこと、上に引いた第二十一回の場合と同様である。ただ、玳安や鄭愛月のセリフはむしろ例外で、『金瓶梅』においてこの形はふつう、「西門慶悉把今日門外撞遇魯華、張勝二人之事、告訴了一遍」(西門慶は、きょう城門の外で魯華と張勝のふたりに出くわしての一部始終を、ひととおりに話して聞かせた＝第十九回)というように「説」「告訴」などの動詞を伴って、なんらかの読者既知の経緯や事情を相手に伝えたことをいうのに用いられている。玳安の発話には動詞こそ伴わないものの、この小者が潘金蓮たちに語っている経緯は、読者が前回末に読んだ内容と齟齬がない。最長の鄭愛月のセリフにしても、読者未知の情報こそ含むものの、林太太と男女の仲になろうと企てる西門慶(と読者)への情報提供の意味合いが強い。このように「悉把」に導かれる発話内容は、情報の正確さが作中の聴き手に対しても小説読者に対しても保証される場合が多いようであり¹⁴、なればこそ事実関係を端的に伝える玳安の語りも、この形を取り得たのであろう。

2-B 潘金蓮の語り

次に、話者が嘘をつく場面の例を挙げたい。第二十五回、来旺という小者が、出張中に妻に手をつけた主人・西門慶のことを酔って誹謗し、さらには不貞の手引きをしたのは潘金蓮だと公言する。それを聞きつけた別の小者が、来旺のことばを潘金蓮と孟玉楼に伝えたところ、潘金蓮は孟玉楼に、以下のような説明をする。

「冬のことで——あんたには言おうと思いついて言わなかったけど——、大姉さまが喬大戸の家へお酒を飲みについてお留守で、私らはみんな表で碁を打っていた日があったでしょ。父様のおかえりだと女中が言うので、お開きにしたじゃない。あの後、私が中の門あたりまで行ったら、小玉が軒下の廊下に立ってました。たずねると私に向かって手をひらひらさせるので、花園の手前まで行ったら、玉簫ってあの犬の肉めが、通用門のところ立っていたの。ふたりのために様子をうかがってたのね。そうとは知らないから、そのまま花園へ向かおうとしたら、玉簫がさえぎって入れようとせず、『父様が中においでです』と言うので、二言三言罵ってやりましたよ。『この犬の肉め、私が思い直して、お前の父様をもちど怖がりだしたとでもいうのかい』とね。てっきりこいつと何やら裏取引があるものと疑ったんだけど、中に入ってみたら、なんとあいつはかみさんと築山の洞窟で仕事してたの。あの女房、私が入ってきたのを見ると、顔をさっと赤らめて出ていきました。父様は私を見てきまりわるそうにしてたんで、二言三言『恥知らず』って罵ってやりましたよ。それからかみさんは部屋にやってくると、すがりつきひぎまづいて、奥様には言わないでほしいと頼んできました。正月には、父様は淫婦めを私の部屋に置いてひと晩過ごそうとしたけど、私と春梅でいくつか咬みついてやりましたよ。それからど

¹³ 太田辰夫『新訂 中国歴代口語文』(朋友書店、2007)、59頁。

¹⁴ ただし第四十八回(14a-b)、「来保対西門慶悉把上項事情訴説一遍」として導かれる来保の報告では、趣旨の変わらぬ範囲で伝言に潤色が施されている。

れだけ経とうが、あいつの影だって近寄せたものですか」

語り手によって第二十二回に描かれた冬の密会をめぐる顛末は、細部で多少の違いはあるものの、おおむねいま見たセリフで金蓮が語った内容と符合している。しかしそこから先の潘金蓮の言葉（「それからかみさんは」以下）には、一転して嘘が多くなる。まず惠蓮が金蓮にひざまずいたのは冬の密会后ではなく、正月の密会時の不用意なひとことを金蓮に盗み聞かれたと知ってのことである。潘金蓮は実際には周りに人がいないと二人を引き合わせてやり、それにより西門慶の歓心を買おうとしていた。さらに正月の密会時にも、場所の提供を断ったことは事実ながら、かわりに西門慶が選んだ密会場所である築山の雪洞に、布団と火鉢を運び入れて、密会の協力をしてやっている。

簡単にいえば、密会の手引きをしている疑い（実際そのとおりののだが）を掛けられた金蓮は、まず自分が二人の密通を知ったいきさつについて詳しく、かつほぼ正確に語り、二人のことを非難する。いっぽうそこから先、自らが協力者としてふるまった段については、話を大きく捻じ曲げつつ手短かに触れて、自分は潔白であるという筋立てをこしらえている。

この箇所作品の語り手は、潘金蓮が嘘をついたとはどこにも書いていない¹⁵。そのため、潘金蓮がどのような嘘をついたのかを知るためには、読者は疑いをもって潘金蓮のセリフを読み、作品のかなり前にもどって実際の事の経緯を確かめる必要がある。語られる部分のうち前半はおおむね事実を述べており、後半も実際にあったことの断片をちりばめながら話を作っているため、潘金蓮の嘘はかなりわかりにくいものになっている。

作中人物の語るわかりにくい嘘は、この作品の口頭芸能からの距離の遠さを示すものともいえる。いま見た箇所を仮にこのまま読み上げる形で口演した場合、よほど記憶力のよい聴衆でもないかぎり、この女がどのような嘘をついたのか、その場で正確に把握することは難しいであろう。読者の知っている通りの事実関係を手際よく簡略に語るのではなく、事実を取捨選択し、伏せるべきは伏せて、意図的に相手に与える印象を操作するという潘金蓮の語りに見られる策略は、『金瓶梅』そのものの語られかたを考える上でも示唆に富む。

2-C 呉月娘の語り

潘金蓮の場合は、事態を十分に把握している語り手が微妙な嘘をまじえることで印象を操作していたのだが、次にみる第四十一回の呉月娘の語りは、語り手自身が場面の中心にいたにもかかわらず、読者が知っているその場面の様相を、語りにおいて十分に再現できない例である。

この回の前半には、喬洪という富豪の妻に元宵の灯籠見物へと招かれた西門慶の妻妾らの様子が描かれる。喬洪（喬大戸）はもともと西門慶の向かいに住んでいた人物で、上の潘金蓮の語りにもちらりとみえたが、その家は西門慶に売却して、いまは西門慶と同じくらいの規模の邸宅を東大街に構えている（第三十三回）。

喬洪と西門慶とは単に元の近所どうしであるにとどまらず遠いながら姻戚関係もあり、西門慶の正妻・呉月娘の長兄・呉鎧（作中ではふつう呉大舅と呼ばれる）¹⁶の息子である呉舜臣は、喬大戸の妻の姪たる鄭三姐を娶っている（第三十五回）。招待客の顔ぶれや席次、宴の次第、出された菓子、料理などについてくわしい描写があった後、以下のような顛末でとつぜん、月娘らが連れてきた西門慶の息子（李瓶児との子）と、訪問先の喬家の女兒とのあいだに縁談が持ち上がる。

喬大戸の奥方は酒を注いで回るべく席を下り、月娘に注ぐとこんどは尚舉人の奥方のところへ酌にまわった。月娘はそこで席を下り、着替えて化粧を直そうと奥の部屋へおもむいた。孟

¹⁵ 郭洪雷氏は『金瓶梅』が『水滸伝』と異なる点として、人物の心のはたらきを作者が解説することなくセリフの語調のみで浮かび上がらせる点を挙げている（『中国小説修辭模式的嬗變——從宋元話本到五四小説』、上海三聯書店、2008、75頁）。

¹⁶ 鎧という名は第六十四回で読み上げられる祝詞のなかにただ一度見える。なお近年、呉鎧という名で山東陽穀出身の正徳九年の進士が実在することが指摘された（小松謙『水滸伝と金瓶梅の研究』汲古書院、2020、286頁）。

玉楼も後につづく。喬大戸の奥方の寢室へと行ってみれば、乳母の如意が官哥を見守っていた。

炕オンドルに小さな布団を敷いて寝かせているかたわらに、この家にさいきん生まれた娘の長姐ちようしやも横になっていた。そっちがひとつ打ちゃこっちもひとつ、という調子で遊んでいるふたりを見た月娘と玉楼は、ひどくよるこんで言った。

「このふたりったら連れ合いみたいですね」

そこへ呉の大兄嫁が入ってきたので話しかけて、

「お義姉さま、ちょっとご覧になって。ふたりったらちっちゃな連れ合いみたいなんですよ」

大兄嫁は笑って、

「ほんとうだ。子どもたち、炕の上で手を伸ばしたり足をばたつかせたりしながら、そっちが打つならこっちも打つよって、赤い糸で結ばれたちっちゃなおふたりさんみたいに遊んでるのね」

喬大戸の奥方と女客らが揃って部屋に入ってきたので、呉の兄嫁はかくかくしかじかと説明した。喬大戸の奥方は、

「親戚の皆様お聞きください。我が家ごときがどうして、こちらの大姑娘おばさまのお宅とお近づきになれるでしょうか」

月娘、

「親戚同士というのに、おっしゃるものですね。私の兄嫁は誰で、鄭三姐は誰ですか。私とあなた、親しい者同士さらに縁組するってだけのことですよ。うちの子が相手だって、お嬢様の不面目にはならないでしょうに、どうしてそんなことおっしゃるの」

玉楼は李瓶児をつついて、

「李の姉さん、あんたはどう思うの」

李瓶児は笑うばかり。呉の兄嫁は、

「喬さん、言うとおりになさらなきゃ怒りますよ」

尚拳人の奥方と朱台官の奥方も口を揃えて、

「呉さんのせっかくのご厚情ですから、喬さん、遠慮なさるものじゃありませんよ」

そこでたずねて、

「お宅の長姐さんは、去年の十一月生まれですよね」

月娘、

「うちの子は六月二十三日生まれです。五ヵ月上だなんて、まさにお似合いね」

皆はそこで有無をいわず、喬大戸の奥方と月娘、李瓶児を表の広間へと引っ張っていき、奥方と月娘とは単衣の襟を切り取って交わし、婚約の証とした。妓女ふたりは弾きかつ歌う。すぐさま話が伝えられると、喬大戸はくだもの箱と赤の緞子三匹を持ってきて酒を注いだ。月娘がそこで玳安と琴童に、いそいで家にもどり西門慶に伝えるよう言いつけると、たちまち酒二甕と緞子三匹、堅いビロードや金糸で作られた赤や緑の造花、螺鈿で飾られた四つの大きなくだもの箱を担いでもどった。両家は宴席に赤い布を掛けて祝い酒を飲む。さても広間には、綺麗な蠟燭が高く掲げられ、飾り灯籠は燦爛とかがやき、麝香のかおりは立ち込めて、喜び笑う声がさざめき渡る。

赤ん坊たちのかわいい仕草からふと思いつかれた縁談が、みるみるうちに形をとって正式な縁組へと発展していく。その雰囲気の中では、抵抗する者の言葉は否定され、やがて「有無を言わず（原文「不由分説」）」婚約の証を交換するところまで、話が一気に進んでいく。視覚・嗅覚・聴覚による描写によって、めでたい雰囲気がたくみに描写されていく。

引用箇所の後、作者は歌い女たちが祝いのために歌う曲を長文にわたり引用している。これは元・喬吉『玉簫女両世姻縁』雑劇の第三折にみえる曲を一部省略したものである。題名通り生まれ変わって結ばれる男女を描いた作品であるが、第三折は辺境の乱を鎮めて功成り名遂げた主人公・韋皋が、帰路に通りかかった荊州で節度使を務める旧友・張延賞の家に招かれ、その宴席でかつて生き別れた妓女の玉簫と再会する場面。病没した玉簫はこのとき転生して張延賞の養女となっているが、名前も容貌も前世と変わっていない。養父の命で酌をする玉簫にあれこれ話しかける韋皋に対し、張延賞はその非礼を咎め、韋皋が事情を説明しても信じずに怒りをあらわにす

る。アンドルー・プラックス氏はこの曲が〔鬪鶴鶉〕の曲牌によって開始されることを「物語の状況をアイロニックに反映するような曲牌を選ぶ」例とみなし、これが「官哥の婚約の表面的なめでたさに皮肉っぽくケチをつけている」旨を述べているが¹⁷、歌われる内容そのものが、

〔聖薬王〕
まったくどうして救おうか
なだめ難し
公孫弘の東閣は喧騒の場となり
玳瑁の宴席は散じて
鸚鵡貝の杯は放られ
銀の燭台も赤い紗の灯籠も蹴倒され
三尺の剣が箱から抜かれる

といった婚約の席に似つかわしいとは思えぬ内容であり、官哥の夭折によってけっきょくは甲斐なきものと終わるこの婚約の行く末を、暗示していると解釈できる。こうした示唆はありつつも、物語内の人物はこの歌の歌詞をとくに咎めることもなく、全体にめでたく高揚した、躁的ともいえる雰囲気での婚約は調えられる。

ところが家にもどった呉月娘を待っていたのは、浮かぬ顔つきの西門慶だった。

西門慶はちょうど母屋で酒を飲んでいるところだった。月娘たちが入っていき辞儀をして腰かけると、女中らがみなやってきて叩頭した。月娘はまずきょうの酒席で縁組したことをひととおりに話して聞かせた。西門慶はそれを聞くと、

「きょうの宴席には、どなたがいらしたんだい」

月娘、

「尚挙人の奥様、朱序班の奥様、崔家に嫁がれたあちらの義理のお姉さま、それに姪御さんふたりです」

西門慶は言う。

「縁組は結構だが、ちょっと釣り合わんのがな」

月娘、

「それが、あちらのさいきん生まれたお嬢さんとうちの子が^{オンドル}炕で寝ているところを、うちの兄嫁さまがご覧になったんですけど、ふたりいっしょにおふとんのなか、そっちがひとつ打ちゃこっちもひとつとやっついて、まるでちっちゃな連れ合いみたいだというんで、私らをそちらへ呼んでこの話を持ち出され、お酒の席でいつの間にやら、この縁組ができあがってしまったんですよ。それで小者をやってあなたに知らせ、お祝いのくだもの箱を届けてもらったんです」

西門慶、

「縁組したんだから結構だが、ちょっとばかり釣り合わんのがな。喬さんの家は、今でこそああいいう家産持ちだが、所詮はこの県の^{かねもち}大戸というだけの平民さ。お前や俺はいまや官職にある身で、役所でご用事だつて受け持っているんだ。こんど顔合せの酒の席で、普段用の円帽をつけたあの人が、俺たち役人一家とどうやってつきあうんだい。見られたもんじゃないだろう。こないだ荊南崗が、軍営にいるうちの親戚の張さんに頼んで、俺と縁組したいと何度もすり寄ってきたんだ。やっつと五ヵ月の娘が、やっぱりうちの子と同年だからといってな。俺は、きちんとしたおっかさんの子ではなく部屋の生まれ（側室の子）だというのが気に食わなかったんで、承知はしなかった。なのに、あの人の家と縁組をしてしまうとはな」

場面が変わり、華やいだ宴席の雰囲気が消えて、不満げな夫に縁談を説明する段になると、月娘も「いつの間にやら（不因不由）」といった言葉でしか、自らがとつぜん婚約を結んでしまった

¹⁷ Andrew Plaks, *Four Masterworks of Ming Novel*, Princeton: Princeton University Press, 1987, pp.129-130.

経緯を説明できない。月娘の口から一応の事の流れは語りなおされ、夫の素っ気ない反応を察知して大兄嫁に責任転嫁している以外は概ね率直に経緯を伝えているものの、赤い布も、ごちそうも、飾り灯籠も、音楽も、香の薫りも、月娘の回顧からはそぎ落とされ、場にあふれていた慶賀の雰囲気や欠いた事実関係の骨組みのみが語られる形になっている。喬家における婚約はそういった雰囲気に支配されてのことだったことが事後的にあらためて浮かび上がる小説展開で、逆に当初婚約の場面を（語り手を通じて）描いた際の作者は、月娘らのふるまいが読者の目により自然に映るよう慶賀ムードを醸し出していたのだともいえる。語りかたひとつで同じ場面の見えかたががらりと変わってしまうことを、作者は熟知していた。

にぎやかな婚約の場面のあとに、西門慶は家格という観点を持ち出して、呉月娘の軽率さをとがめる。このような異質な視点の介入は『金瓶梅』にはしばしばみられるもので、たとえば第三十九回においては、前半では西門慶の子に法名をつけるための道教儀礼、後半では尼僧による宝巻の朗誦が行われる。前半の参加者は男性のみ、後半の参加者は女性のみという対偶構成によって書かれた回であるが、前半から後半にうつる箇所では、道観で授けられた子どものための衣装類が家にとどけられ、留守をまもる女性の目に入る。女性たちのセリフのなかでは、道服や装身具の帯びている宗教的意味は捨象され、細工や装飾のたくみさなど、まるで異なる観点からの論評がおこなわれる¹⁸。いわば、女の視点で男たちの営みが眺められるのであるが、いまみた第四十一回の例は、赤ん坊の可愛さのあまり勢いづいたままに縁組をしてしまった月娘が、西門慶から思いがけずその身分不釣合を指摘されるのであり、子どものかわいらしさに夢中になった女たちのふるまいを、家格のつり合いを重んじる男の視点で冷ややかに西門慶——この男はこの男で就いたばかりの官職を鼻にかけている——が眺めるという、第三十九回とは逆の展開が描かれているのである。

平田昌司氏は、明清期には「纏足することで「外」の世界を歩まないことを肉体化し、自らの声を家のうちに籠らせることが、まっとうな女の標識となっていた」¹⁹とし、『金瓶梅』にあらわれる女たちの会話についても、「内」の「私」^{わたくし}だけに籠らせられて「おり」、「外」の「公」につながることばのモードをもつことはない²⁰と述べている。この観点からいえば、ここでの月娘は家で夫相手に話しているとはいえ、思いがけず「外」の「公」の指標を持ち出して縁談への不満をこぼしてきた夫に対し、語るべき言葉を持たなかったのである。

小結

前節で「雰囲気」とか「ムード」といった語を用いて説明した小説展開は『金瓶梅』に特徴的なもので、そうした場面では感情を支配するなんらかの気分の中にある人物（たち）の演じる感情的に高揚したふるまいが、気分の外の人間により、まったく別の見方でとらえ直される²¹。

そうした例としてさいごに『金瓶梅』からもう一例、第三十三回、西門慶があたりしく雇った韓道国という番頭の妻が、夫の弟である韓二と密通しているのを知った近所の遊び人たちの描写を引いてみたい。

口紅と白粉をつけ、化粧して色気をふりまき、いつも門口に立って色目を使うこの女に、はからずも街の遊び人どもが目を留めた。ところがちょっと手を出してみれば、臭うが崩れぬ廁の煉瓦といったところ。もったいくさく罵りつけてきたので、街の若者らはなかなかおさまらない。こっそり二人、三人と寄り集まっては、陰であれこれ噂をし、あの女が裏でどんな奴と事を構えているのかと探りを入れ、半月も掛からずに義理の弟である韓二との艶聞をかぎつけたのだった。もともと牛皮小巷の韓道国の住まいは、間口が三間で、家の両脇には隣家が接し、裏門は溜め池に通じていた。この連中、韓二が入っていくのを見さえすれば、婆さんを雇って

¹⁸ 田中智行「『金瓶梅』第三十九回の構成」（『東方学』第119輯、2010）、68-70頁。

¹⁹ 平田昌司「しゃべるな 危険——17-20世紀中国の女のことば——」（村田雄二郎・C.ラマール編『漢字圏の近代——ことばと国家』岩波書店、2005）、62頁。

²⁰ 同前、63頁。

²¹ 田中智行「『金瓶梅』の感情観——感情を動かすものへの認識とその表現——」（『日本中国学会報』第57集、2006）、91-97頁。

水撒きによこしたり、夜中に壁によじ登って覗いたり、昼間にはひそかに子ザルを放ち、裏の溜め池で蛾を捕まえるんだと偽らせたりして、ひたすら姦通の現場を押さえる機をうかがっていた。はからずもその日、搗鬼の韓二は兄貴が不在と聞きつけ、昼日中から酒を食らい、女とふたり酔っぱらうや、内側から戸に門をして、部屋で事に及んだ。思わぬことに、連中はこのやりくちを横目でとらえており、子ザルが壁を乗り越えて裏門を開けると、いっせいになだれこみ、部屋の戸をこじ開けた。韓二はふりきって逃げ出そうとしたが、若者のひとりに拳固をひとつ食らい、打ち倒されて捕らえられた。女房はまだ炕の上において、大あわてで服を着ようとしたが時おそく、ひとりが進み寄ってまずズボンをつかみとると、ふたりまとめて一本の縄でしばり、外へ引き出した。

韓道国の妻が浮気女であるという情報が提示されているので、読者は当初、これを痛快な捕り物として読むことになる。じっさい語り手の口調もどこかたのしげで、密事をあばきたてる若者らの側に立った描写がなされている。ところがこの後、韓道国が賄賂をつかって役人である西門慶に働きかけた結果、姦夫姦婦にはお咎めがなく、かえってこの遊び人たちに厳しい処分が下されることになる。その裁判の場面を引く（第三十四回）。

ややあって、西門慶は会釈して夏提刑に、
「長官、王氏を召し出すこともありますまい。おそらく王氏はそれなりの見映えなのです。このならず者らは、からかった王氏がなびかないので、こんな罨をでっち上げたのでしょう」
そこで、頭的車淡を前に呼んでたずねた。
「どこで韓二を捕らえたのか」
皆が、
「きのう王氏の家で捕らえました」
また韓二にたずねた。
「王氏はお前とどのような続柄か」
隣組頭、
「兄嫁でございます」
また隣組頭にたずねた。
「この連中はどこから家に入ったのか」
隣組頭、
「壁を越えて入りました」
西門慶は大いに怒って叱りつけた。
「このならず者どもめ、どうしてくれよう。この者が義理の弟ならば、王氏もこの者の死没時には喪に服す近親の内。訪問を許されぬということがあろうか。それに引きかえお前たちならず者は、どういう続柄だというのだ。どうして壁を越えて入ったりした。おまけに家は夫の留守中で、幼い娘も部屋にいたとあれば、その目的は、姦淫でなければ窃盗ではないか」
左右の者にひと声命じ、締め棒を持ってこさせて各人の脚に括りつけ、大きな棍棒で二十打ち、皮は裂け肉は綻び、鮮血が迸り流れるまでにした。

崇禎本の批評者は、西門慶のセリフに付した眉批で、「判決の筋道はまっとうで揺るぎないのだが、少なからず実情を見損なってもいる」と評しているが、ここで西門慶の語る言葉に、事実関係の誤りはまったくない。今風にいえば遊び人らの行ったことは経緯の如何を問わず不法侵入に違いないわけで、中にいた二人は——『礼記』曲礼上篇に「嫂叔は通問せず」とあるように伝統的な観念において交際すべきでないとはいえ——親類同士、かたや侵入したのは赤の他人である。

上に見てきた例とは異なり、西門慶は自身がその場になかった出来事について述べているため、その点では本稿でとりあげた回顧行為とは異なるものの、第四十一回の例を想起してみるなら両者の類似は明らかであろう。つまり、ある雰囲気の中なかでは許容されるどころか好ましいことにすら見えた——語り手がそのように見せていた——事態（捕り物や婚約）が、その場で当事者たちを突き動かしていた雰囲気をとりさって骨組みだけにしてみると、好ましからぬ事態、い

わばノリだけで行われてしまった軽率な行動であったように見えてくる。第三十四回の場合は西門慶の判示が、第四十一回の場合は呉月娘当人の語りが、その落差を読者に印象づけることになる。

こうした小説効果を、たとえば『西遊記』における孫悟空の語りに求めるのはお門違いで、場面の語り直しに着目して比較した場合にも、ふたつの作品の質的な違いは明らかといえよう。『西遊記』においては、出来事が作中人物により回顧されるとしても、語り手が読者に見せていたのと異なる新たな様相を出来事が帯びることはない。話者による立場のちがい——Aにとって望ましいことがBにとっては望ましくないというような——こそあれ、出来事の様相は安定しており、『金瓶梅』のように、読者の目にした事態の意味そのものが揺らぐことはない。それはまさに小説の語りかたの差なのであって、真実を何度でも率直に語る孫悟空と、微妙な嘘で相手の印象を誘導しようとする潘金蓮との間に見られるような、語るという営みに対する意識のちがいが、小説そのものの語り手の在りかたにも反映しているのである。

※本稿は科学研究費補助金（17K13432）による成果の一部である。

第一次世界大戦と日本のドイツ語学習雑誌 —『獨逸語學雜誌』に於けるドイツ観の変遷—

中 直一

1 はじめに

第一次世界大戦の際、日本に於いてドイツ語はどのような扱いを受けたのであろうか。日英同盟に基づき、英国の敵国であったドイツは、第一次世界大戦が勃発すると、日本にとっても敵国となった。明治初年以降、日本はドイツ文化に学ぶところ極めて大であったが、第一次世界大戦が始まるや、以て範と為すべき文明国と思われたドイツが、いきなり敵国となるに至った。事態のこのような急転の中で、それまでドイツ文化の普及の一翼を担って来たゲルマニストたちは、どのような対応をなしたのであろうか。

本稿では、以上のような問題意識のもとに、明治後期から昭和初期にかけて刊行されたドイツ語学習雑誌『獨逸語學雜誌』¹を取り上げ、同雑誌に於ける日独戦争関連の記事を読み解くことを通じて、はからずも敵国となったドイツの言語文化に対し、ドイツ語学習雑誌の執筆者たちが、どのような態度を見せたのかを分析する。

ところで、かかる問題の研究対象として評論雑誌等を取り上げずに、敢えて語学学習雑誌を取り上げることにについて、奇異の念を抱く方がおられるかも知れない。ドイツ語学習雑誌（に限らず、およそあらゆる外国語学習雑誌）の本旨は、まず以て読者の外国語習得を助けるという、きわめて実務的・実用的な所に存するものであり、当該国の国家体制や国際関係について何か論評めいた主張をなすという思想的な方面に関しては、外国語学習雑誌としてはむしろこれを避けるのが通例と目されるからである。

『獨逸語學雜誌』の内容を見れば、確かにドイツ語中級・上級学習者向けの記事が大半を占める。ただし、雑誌のタイトルの一部に「語学雑誌」という文言が含まれるからと言って、言語学の専門雑誌ではない。勿論『獨逸語學雜誌』の掲載記事の中には中級・上級読者向けの、ドイツ語のかなり詳しい語学的分析も含まれるが、他方ドイツ語で書かれた様々な専門分野のテキストとその和訳も掲載されている。つまり、色々な専門分野のドイツ語原文を読みたいと欲する読者のニーズに応じて、『獨逸語學雜誌』ではドイツ語原文と和訳を掲載し（そして若干の語注をつけ）、読者の自学自習の一助たらしめている。このような独文和訳テキストとして何を選択するかという点に、この雑誌の姿勢が窺える。また同誌の巻末の編集後記に相当する部分²に於いて、第一次世界大戦勃発後は、戦争に触れる発言も掲載されるようになる。また同誌の巻頭に掲載される記事は——その多くは、勿論ドイツ文法の解説記事であったり、様々な専門分野のドイツ語原文とその和訳の対訳記事であるが³——第一次世界大戦が勃発すると、当の戦争を直接論じた日独両語で書かれた記事の他、さらに戦争がドイツの敗戦で終了するとゲルマニスト以外の執筆者が日本語のみで書いた論説文的な文

¹ 国立情報学研究所の CiNii によれば第 1 号は 1898 年に、そして最終号である第 36 卷 8 号は 1934 年 8 月に刊行されている。なお宮永孝『日独文化人物交流史』（三修社、1993 年）p. 339 には「明治三十一年秋創刊（中略）昭和十年まで四〇年間続いた」と記されている。明治 31 年は西暦 1898 年なので CiNii の情報と一致するが、昭和 10 年は西暦 1935 年に当たるので、CiNii の記す 1934 年という情報と一致しない。筆者の手元には最終号はないため、確認作業は今後の課題としたい。また宮永書には「月二回刊行された」とあるが、獨協大学図書館 OPAC の『獨逸語學雜誌』の所蔵データによれば月 1 回の刊行のようである。

² 名称は一定せず、「編輯局より」及び「編輯局だより」が使用される号が多いものの、その他にも「編纂局より」、「編輯局漫言」という呼称が使用されることもあり、また毎号掲載されたわけでもない。

³ 例えば第一次世界大戦勃発前の巻頭記事には、「日獨両語比較研究」（第 16 年第 2 号 pp.1-2, 1913 年 10 月）といった語学解説記事の他、日獨両語で書かれた „Aus dem Tagebuch eines Sprachlehrers“ 「或る語学教員の日記の一節」（第 16 年第 6 号 pp.1-2, 1914 年 2 月）という、日記の体裁を借りた外国語教育論・教員論、同じく日獨両語で書かれた追悼文 „Der Tod Ihrer Majestät der Kaiserinwitwe“ 「皇太后陛下の崩御」（第 16 年第 9 号 pp.1-2, 1914 年 5 月）、アイヒェンドルフの詩の対訳 „Reiselied“ 「旅の歌」（第 16 年第 10 号 p.1, 1914 年 6 月）など、多岐にわたる。

書も掲載されるようになる。こうした記事の多くは巻頭に掲載され、あたかも評論雑誌の巻頭言の如き趣きを与える（但し同誌では「巻頭言」という項目名はない）。

本稿では、『獨逸語學雜誌』に掲載された、上記の如き記事、即ち巻末の編集後記的な文書及び巻頭言的文章を中心に、交戦国ドイツとその言語文化に対し、ドイツ語学習雑誌がどのような論を掲載したのかを見て行く。上に記したように、こうした記事は、『獨逸語學雜誌』の通常の執筆者（同誌ではこれを「同人」と称している）の他、外部有識者による寄稿も含まれる。つまり様々な立場の執筆者が含まれるわけで、『獨逸語學雜誌』に掲載される第一次世界大戦に関わる記事が全て同じ方向性を持つわけではない。そのことを念頭に置きつつも、本稿ではドイツ語普及を本旨とする雑誌が、当時の敵国ドイツの言語と文化をどのように把握し、それを日本のドイツ語学習者にどのように伝えようとしたのかを、いわば俯瞰的な視点から検討しようとするものである。

その際、筆者は(1)日独戦争開始当初、(2)青島戦終結から欧洲戦線膠着期、及び(3)ドイツ敗戦確定後、の三つの時期に分けて『獨逸語學雜誌』掲載文を分析し、そのドイツ観の変遷を跡づけたい。

2 学ぶべき外国か、軍国主義の国か——日独戦争開始当初

第一次世界大戦勃発当初、フランスに侵攻する目的で、ドイツはまずその経由地であるベルギーのリエージュ要塞を攻略したが、このことは『獨逸語學雜誌』にも大きな衝撃を与えたようである。同誌の1914年9月号の巻頭にはK.Yamaguchiの名で⁴ „Der Krieg“ 「戦役」なる文章（日独両語で執筆⁵）が掲載されている。

「人類の耻辱ながら吾人は彼のリエージュの血戦を事実として報告せざるを得ないのである、（中略）此一戦に四萬の人命を失ひたりといふは實に慘烈の極みである。そは又何の爲めか、唯だ佛國々内に自由に通過せん爲めである、嗚呼基督教の愛は何處に在る、人道は何處に在る、最も文明の人間が却て龍虎よりも恐ろしく殘虐なりとは洵に涕泣に堪へざる恨事である。」（第17年第1号 p. 2, 1914年9月）

ドイツ国民が有していた筈の「基督教の愛」、即ち基督教の愛の精神や、「人道」の立場が全く失われ、ただただフランスに侵入するために隣国ベルギーに攻め込んだドイツ軍の行為に対して、憤懣やるかたない口吻での批判がここに展開されている。明治以降、日本は多くの分野（とりわけ医学、法学）でドイツの斯学に学び、ドイツ人をまさに「文明の人間」として尊重して来ただけに、そのドイツ人が隣国ベルギーに侵攻した際に覚えた驚愕と落胆の情は極めて大きかったものと思われる。

以上は、開戦直後の巻頭記事であるが、同じ号の巻末「編輯局より」には、ドイツ語学習者に向けた次のような言葉が記されている。

「諸君よ！ 諸君の中には、吾々が獨逸語に親しんでゐる結果は、獨逸に對して一種の偏愛を有してゐて、全體の大局に對する判斷を過りはしないかと危むものがあるかも知れない。之れは大きな誤である！！／⁶ 諸君！國家有事の際、吾々の眼中には、親もなく、子もなく、妻もない、況んや、一獨逸、一露西亞、一佛蘭西おや（ママ）である。」（第17年第1号 p. 31, 1914年9月）

⁴ K.Yamaguchi とは、『獨逸語學雜誌』の当時の編集主幹・山口小太郎であると思われる。なお同誌同号の目次では、巻頭掲載文のタイトルは「Weltbrand 世界大亂」となっていて、本文のそれとは異なっている。

⁵ 日独両語で執筆された記事から引用する場合、本稿では日本語版から引用することとする。なお引用に際して、筆者の PC 環境の許す範囲で旧字旧仮名を使用した。引用原文には JIS 第一水準第二水準以外の漢字や変体仮名も含まれるため、その場合は新字新仮名を使用した。

⁶ 引用文中の「／」は改行箇所を示す。以下本稿中の同記号は全て同じ意味である。

ドイツ語学習雑誌だからといって、ドイツに対する「偏愛」を有するものではない、ということがここに明確に述べられている。巻頭文でもドイツに対する悲憤慷慨の言葉に溢れ、ドイツ擁護の姿勢は全く見られなかったが、この「編輯局より」でもドイツを擁護する文言は見られない。ただし、ドイツの交戦国である三国協商側のロシアやフランスに加担する立場が示されているわけでもなく、およそ日本以外の外国のいずれにも与しないという姿勢が示されている。

ところで、開戦直後に記された上記の二つの文章では、戦争相手国であるドイツに対する姿勢は示されていたものの、その国の言語であるドイツ語に対する位置付けが、ドイツ語学習誌『獨逸語學雜誌』に於いて変化するや否やについての言及はなかった。ドイツが敵国となった今、その国の言語であるドイツ語は、考え方によっては〈敵性語〉として排除すべき位置付けとなりかねない。そのような考え方は、ドイツ語学習を推進するための雑誌にとっては全くの自己矛盾となる。

このジレンマについては、早くも上記文書掲載の次号「編輯局だより」に於いて言及が見られる。そこでは、交戦相手国の言語であるドイツ語を、戦争中も（そして戦後も）学習する必要があると論ぜられている。そこに見られるのは、敵国をよく知るためには当該国の言語を学ばねばならない、という論法である。

「世界大戦争——日獨戦争は、獨逸語に對する一般的興味を惹き起したるもの多大に候、而して獨逸の研究は戦亂中のみならず、戦争後に於ても、否な戦争終結後にこそ一層大なる利益と興味とを與ふるもの可有之と確信致居候」（第17年第2号 p. 31, 1914年10月）

ここでは戦争終結後の時代にさえ言及されているが、実のところこの時点では、戦争の帰趨は見えていない。「編輯局だより」の執筆者は、戦争の勝敗に関係なく、対戦相手の言語の研究が必要という見方を示しているわけである。

続く第3号では「土生」の署名入りで、「編輯局漫言」の欄（これは前号までの「編輯局だより」に相当する）に於いて、日清・日露の両戦争に比して、日独戦争に関しては日本国民が比較的冷静である点を評価して次のように述べている。

「ある學者は、我が國民が今回の日獨戦争に對して、日清、日露の際に於ける程、眞劍でないといふことを憤慨し非難するものがある。けれど吾人は我が忠勇なる國民が泰然として此の世界的大禍亂に處する悠揚の態度を以て、眞に大國民の襟度であると寧ろ賞歎しやうと思ふのである。」（第17年第3号 p. 31, 1914年11月）

つまり日独戦争に際して、敵国ドイツに対しても冷静さを失わぬ当時の多くの日本国民の態度を賞賛しているわけである。この「編輯局漫言」では上記の論述に引き続き、「京都の醫科大學とかでは、獨逸語を一切排斥する決議をしたとか、しないとかいふ評判である」と述べ「元來、獨逸語を排斥しなくては、獨立が出来ないといふ様な、そんな憐れな學問が此の日本にあるとは初耳である」（同号 p. 31）と痛烈な文言を以て、日独戦争中にあってもドイツ語を学ぶ必要性があると主張している。即ち、ドイツに対する開戦直後の悲憤慷慨の念とは別に、国民の中にむしろドイツに対する冷静な感情を持つ人々がいる一方、高等教育機関の一部に於いてドイツ語排斥の動きがあったことも窺い知ることが出来るのである。

3 大戦は対岸の火事か——青島戦終結から歐洲戦線膠着期に於ける状況の変化

前節で見たように、日独戦争開始直後は、フランスに侵攻するためにベルギーを攻略したドイツに対する人道主義的非難が見られる一方、敵国ドイツに対して冷静な態度を呼びかけ、ドイツ語の学習を引き続き行うように提言する内容の文が見られた。こうした態度は、次第に変化してゆく。即ち、青島での戦闘が終結するや、この第一次世界大戦が日本から見て、遠く歐洲列強同士の争い事と映り、戦争があたかも対岸の火事であるかの如くに受け止められ始めたのである。

第一次世界大戦に於いて日本が直接ドイツと交戦したのは、主に青島での戦闘であり、これに加え南洋諸島でも日本はドイツ東洋艦隊と対峙していたが、青島での陸上戦で日本が勝利して多数の俘虜を日本に収容するという段階に至ると、『獨逸語學雜誌』では、早くも戦争終結の雰囲気感を漂わせた記述が登場する。

1914年12月の「編輯局漫言」（これも文章末に「土生」という署名がある）は、戦勝に関し「久しく氣に懸つてゐた青島も目出度く陥落しました」と述べた後、次のように論じている。

「敵を打ち懲らすまでは、渾身の勇を鼓して闘ふも、一旦敵が哀をわれに乞ふに至るや、却つて敵の有する美點敵の表はした長所を推賞して、敵の爲めに其の秀れたるを嘆美するの徳は古來武士道精神であつた。」（第17年第4号 p.31, 1914年12月）⁷

ここではドイツが「敵」と位置付けられているものの、そのような敵を全面的に否定するのではなく、相手に長所があれば「武士道精神」にかけて、むしろ相手を積極的に評価すべき事が述べられている。第一次世界大戦はまだ終結していないのに、早くも戦勝気分が沸き立つ当時の日本の国民感情がこの「編輯局漫言」にも表れている。つまり日独戦争開始当初の人道主義的なドイツ批判が影を潜め、青島戦終結以降、この戦争が日本に直接関わる事柄というより、遠き世界の出来事であるかのように『獨逸語學雜誌』全体のトーンが変化して行ったものと考えられる。

そしてこのような事態は、歐洲戦線が膠着状態に陥り、戦争が長引くにつれて、次第に強まって行った。即ち、ドイツがもはや〈日本の敵〉であるというより、〈英仏と戦っている歐洲強国の一つ〉という位置付けになって来たものと考えられるのである。

たとえば大村謙太郎⁸は『獨逸語學雜誌』創刊20周年に寄せた巻頭文「第二十年號の首めに」の中で、第一次世界大戦が膠着状態にある現状に触れて、次のように述べている。

「歐洲大戦争は今日に至つて行き詰つてしまつた。しかし翻つて獨逸の力を考へるときは、敵も味方も等しく驚歎の眼をみひらいたではないか。そこに獨逸の力がある。そこに獨逸を研究する價值と興味とがある。彼の勤勉、周到、徹底、彼の軍國主義、彼の唯物的思想、一つとしてわが研究の好題目たらざるはない。」（第20年第1号 p.1, 1917年9月）

まず大村謙太郎が「歐洲大戦争」という書き方をしていることに注目したい。先に引用した1914年10月の「編輯局だより」では「世界大戦争——日獨戦争は」云々という書き方をしており、また翌月の「編輯局漫言」でも「今回の日獨戦争」との記述が見られ、この戦争がまさに日本とドイツの間の戦争であることを強く意識していたことが窺えるが、それから約3年後の大村謙太郎の文章では、戦争が専ら歐洲の事柄と把握されている。しかもこの文では、ドイツの長所を列挙しこそすれ、この国が日本の交戦相手であるということは殆ど窺えない。

そして、大村謙太郎が戦争を歐洲の事柄としたのと平行して、『獨逸語學雜誌』のその他

⁷ この号の「編輯局漫言」は、書き出しの教行が「です・ます」調で、途中から「だ・である」調に変化している。

⁸ 大村謙太郎は獨逸學協會學校で1912年から1920年まで教鞭をとつた（『獨協学園七十五年史』〔獨協学園、1959年〕p.161参照）。なお、『獨逸語學雜誌』創刊に尽力した獨逸學協會學校第4代校長大村仁太郎は、この大村謙太郎の父である。このことは『大村教育著述全集』（同文館、1911年）に寄せた加藤弘之の序に「亡友大村仁太郎君の令息謙太郎君が昨年秋頃余を訪はれて今般先人の遺著數部を全集として出版せんと思ふにつき序文を乞ひたいとのことであつた」（同書 p.1）という記述がみられること、及びこの序の後ろに書かれた大村謙太郎の「全集出版に就きて」に於ける「この度亡父仁太郎が生前の著述を輯め『大村教育著述全集』と名づけて、之を世に公にすることゝなしぬ」（同書 p.2）との言葉から裏付けられる。なお、『大村教育著述全集』では「序」が p.1 から p.4 まで続き、その後「全集出版に就きて」が p.2 から始まる、というページ付けになっている。

の巻頭記事や巻末の「編輯局より」等に於いて、青島戦終結後は、第一次世界大戦や日独戦争に直接言及することが少なくなり、代わって一般記事（ドイツ語学習のための教材）として、ドイツが日本の敵国であることを忘れさせるようなテキストが現れ始める。実の所、青島戦終結後も、日英同盟に基づきドイツは依然として日本の交戦相手であったし、日本国内に多数のドイツ人・オーストリア人捕虜収容所が存在していたのだが、この時期の『獨逸語學雜誌』には、ドイツを風光明媚な国と紹介したり、あるいはドイツ皇帝に関する記事が見られる。

たとえば『獨逸語學雜誌』第19年9号 pp. 1-2（1917年5月）には「Linden 獨逸の名所と古跡」という記事（ドイツ語タイトルも付されているが、日本語のみの記事）が掲載されている。そこでは「大戦亂の渦中にあつての獨逸の努力、それは敵も味方も等しく承認するところで、今更ら改めて申述べる必要もありません」（p. 1）と記されていて、要するにドイツが日本にとっての敵国であるという方向性を非常に希薄化した形で、ドイツの名所古跡を案内するというスタンスがここに見られるわけである。そしてこの「獨逸の名所と古跡」のシリーズは、この後『獨逸語學雜誌』に於いてかなり長期にわたって断続的に掲載される。

これとは別に第20年第8号 pp. 2-3（1918年4月）には、„Kaiserlicher Erlaß“「獨帝の勅語」という、ドイツ皇帝ヴィルヘルムⅡ世がドイツ国民にあてた勅語及びドイツ陸軍・海軍・各守備隊にあてた勅語のドイツ語原文とその和訳が掲載されている。これは勿論、読者がドイツ語のテキストを日本語訳するための和訳練習教材であるが、その題材として敢えて交戦相手国ドイツの元首の文書（それもドイツの国民・軍人にあてた文書）を選択したという点に、『獨逸語學雜誌』に於けるこの当時のドイツ観が窺える。

そしてこうしたドイツ観は、単に『獨逸語學雜誌』のそれに止まらず、むしろ日本国民に広く見られたものようである。ドイツ語履修者の数は、日独戦争開始直後は激減したものの、欧州での戦争でドイツ軍が優勢になった局面では、日本でのドイツ語履修者数が増加したようである。この間の事情について、『獨逸語學雜誌』の当時の編集主幹・谷口秀太郎は、「獨逸科學の將來」と題する文書（これは第一次世界大戦でドイツの敗戦が確定した後に書かれたものである）の中で次のように述べている。

「初め日獨宣戦を見るや獨逸語に志すもの俄かに激減した、是は外國語學校でも、陸軍士官、幼年の兩校、獨逸學協會學校及其他に於ても等しく認められた事實である。然るに昨春獨逸が大規模の總攻撃を行ひ一時巴里を危くせんとするの勢を示すや獨語志望者の類再び舊態に復せんとした、かゝる態度は果して眞面目たるものであらうか。」（第21年第5号 p. 1、1919年1月）

当時の学生・生徒は、確かに日独戦争開始直後はドイツ語履修から離れる傾向を見せたが、戦争の舞台がもっぱらヨーロッパに限定される時期に至ると、〈欧州の強国〉に関心が集まり、戦況がドイツに有利となるや、いったん減少したドイツ語履修者数がにわかに元に戻った、ということである。ここにも、第一次世界大戦開始直後と、青島戦終結後では、日本人の対独感情に変化が見られたことが示されていると言えよう⁹。

4 敗戦国とその文化

第一次世界大戦に於いて、ドイツの敗戦が確定すると、『獨逸語學雜誌』の論調もさらに変化する。開戦当初は〈敵国の言語〉であったドイツ語が、欧州戦線膠着期は〈欧州強国の言語〉と捉えられ、そして今度は〈敗戦国の言語〉となったわけである。このような事態に

⁹ 欧州戦でドイツが優勢になった時期に増加した日本のドイツ語履修者数も、第一次世界大戦で最終的にドイツの敗北が決定すると、またも減少に転じた。この間の事情について畑良太郎は次のように嘆じている。「獨逸が今回の戦争に敗れたが爲に獨逸語の効用が薄くなったやうに一部の人は思つて居るやうである。聞く所に據ると日本の學生中にも獨逸語を學修する者が減少する傾向があるとのことであるが是は大に間違つた事であると云はねばならぬ。」（第21年第12号 p. 1、1919年8月）。なお畑良太郎の文書については本稿第4節でも述べる。

遭遇し、『獨逸語學雜誌』はかなりの危機感を抱いたようである。しばらくは同誌の常連執筆者（即ちドイツ語教育従事者）がドイツ語擁護の論陣を張り、そしてその次の段階では各界の有識者に依頼して、それぞれにドイツ語に関する文書を寄稿してもらうようになったのである。

まずは、前節でも引用した「獨逸科學の將來」と題する文の中で、編集主幹・谷口秀太郎がどのような論拠でドイツ語を擁護しているか見て行こう。

「獨逸の科學は戦前に増して將來大なる進歩を見るべきであらう。獨逸は戦に敗れたる一方に於て反つて文化の方面に發展を遂げるであらう、そして獨逸語が一層貴重さると時が必ず到來するであらう。」（第21年第5号 p.1, 1919年1月）

ここでは政治的・軍事的な面での敗戦国ドイツが、文化的にはむしろ今後も發展して行くという論法が示され、文化の観点から日本に於いてドイツ語が今後も重要な言語であり続けるとの考えが示されている。

第2節で取り上げた K. Yamaguchi¹⁰の巻頭文 „Der Krieg“ 「戦役」は、日独両語で記載され、ドイツ語学習者の独語読解テキストとしての意味合いも持っていた。これに対し上記の谷口の文章は日本語のみで書かれており、ドイツ語読解テキストとしての位置付けは全くない。そして、以下に引用する諸々の文書も、巻頭に掲げられたものは全て日本語のみで執筆されている。それだけにこうした巻頭文は、ドイツ敗戦後のドイツ言語文化に対する『獨逸語學雜誌』のスタンスを、読解教材とは異なった、より強いメッセージ性を込めて読者に伝達する役割を担ったものと考えられる。

さて上記の主張が掲載されてから2ヶ月後、谷口秀太郎は再び巻頭文を執筆し、ドイツ語の重要性を、ドイツの Kultur（文化）の側面から論じている。それは「文明と獨逸語」と題された文章である。

「獨逸に Kultur がある以上、よし政變の爲めに Kultur の歩調が一時不整となる場合があつても、又他民族の爲めに言語に一種の制裁を加へらるゝ事があつても、彼等が Kultur の爲めに奮闘を續くる以上、世界に於ける獨逸語の位置には何等の變化もないであらう。」（第21年第7号 p.1, 1919年3月）

軍事的・政治的な側面と文化の面を截然と分け、敗戦国となったドイツについて、文化面では衰えることがなく、それゆえドイツ語の重要性は全く減じないという論法である¹¹。

『獨逸語學雜誌』は、こうして2号にわたって主幹・谷口秀太郎の巻頭文を掲載し、「文化」の観点からドイツ語の重要性を訴えたが、この号以降、『獨逸語學雜誌』では断続的に各界の有識者によるドイツ論が掲載される。それらの多くは巻頭に掲げられ、日本語のみで執筆されるケースが圧倒的に多いため、谷口の巻頭文同様、読者に対して『獨逸語學雜誌』の立場を強く伝達する性格を持っていたと推測される。

¹⁰ K. Yamaguchi が山口小太郎であると仮定して論を進めるが、山口小太郎は日独戦争開戦当時『獨逸語學雜誌』の編集主幹であった。しかし山口は1917年1月22日に急逝し、第19年第12号（1917年8月）より谷口秀太郎が後任の主幹となった。山口小太郎の逝去に関しては『獨逸語學雜誌』第19年第6号巻頭（p.1の前）、1917年2月にその第一報が、続く第7号 pp.1-3、1917年3月に追悼文が掲載されている。谷口秀太郎の新主幹就任挨拶は上記第19年第12号 p.1に掲載されている。

¹¹ 谷口秀太郎の「文明と獨逸語」が掲載された第21年第7号（1919年3月）から、『獨逸語學雜誌』の表紙デザインが、ゲーテとシラーの横顔に変更となった。『獨逸語學雜誌』では、各年の第1号で表紙デザインを切り替えることが多いので、年の途中での変更は異例である。この間の事情について、同号の「編輯局より」では、新デザインが兒島喜久雄によるものであることを紹介した上で「獨逸帝國が Militalismus によりて討死にしたる今日、獨逸文化の消滅すべきものにあらざること世界的の大文豪 Schiller 及び Goethe の名が不滅なると同じことに候。本誌が依然として獨逸文化の傳達者を以て自認する所以こゝに存する次第に候。兒島文學士が表紙中兩詩人の象像を畫きたる亦その意こゝに存することと存候。」（p.32）と述べている。

上記谷口の「文明と獨逸語」が掲載された次の号で、ゲルマニスト水野繁太郎¹²は「文の國としての獨逸」と題した文章を寄稿し、その中で次のように言う。

「今や武の國としての獨逸は過去のものとなりつゝある、之に代つて文の國としての獨逸が出現しつゝある、而して此文の國としての獨逸が獨逸民族の本體であり又真相であらう（中略）獨逸語の將來にも亦光明が充ち溢れてゐる譯である、獨逸語は從來文明人の言語として、學術語として他の諸國語の上に宛然他をぬいてゐたが、將來も同國語の斯ういふ位置は一層強固に成るであらう」（第 21 年第 8 号 p. 1, 1919 年 4 月）

水野繁太郎は、かなり単純化して〈ドイツ人＝文明人〉、〈ドイツ語＝文明語〉という考えを提示している。これは〈ドイツは武の國ではなくて文の國である〉という主張の一つの帰結に他ならない。武と文の二項対立は軍国主義と文明の二項対立であり、ドイツの眞の姿は軍国主義でなく文明尊重である、という把握法がここで見られる。これは谷口がドイツの文化、Kultur の永続を主張した論と軌を一にするものと言えよう。

ドイツが文明國であるということ、水野はいわば自明のことの如く主張していたが、これに対し、化学者・長井長義¹³は同じようにドイツ民族の優秀性を主張してドイツ語学習の必要性を述べつつも、ドイツ民族の優秀性を無前提に主張するのではなく、ひとつの歴史的前提を根拠として挙げている。

巻頭文「化學工業國としての獨逸」の中で長井長義は、自然科学の中から具体的に化学の分野を取り上げ、ドイツの化学が 19 世紀前半に於いては英仏及びスウェーデンに遅れを取っていたことをまず指摘する。遅れを取ったドイツであるが、その後ドイツでは大学の教授法改革が行われ、「演繹法を廢して歸納法を採用し、實驗を基礎とする方針を定め、又教授は講義を爲すも夫れと同時に學生に命じて必ず實驗を爲さしめるやうにした」と長井は述べる。ドイツ人がこのように、とりわけ自然科学の分野で實驗を重視する方法を身につけたことが、後にドイツに於ける學術の隆盛を招く契機となった、というのが長井の論法である。そしてこのように學術進展の歴史的経緯を述べた後、長井は次のように主張する。

「かゝる間の消息は實に獨逸民族の根本的研究心を物語るもので此精神は又其國語にも潜在してゐるのである、故に斯る國民の性格を識るにはどうしても其國民の言語を知るに若くは無い」（第 21 年 第 9 号 p. 1, 1919 年 5 月）

長井はこのように、歴史的経緯に基づくドイツ自然科学の進展を「獨逸民族の根本的探究心」を示すものとする。つまりドイツ民族の心性の中に根本的探究心の存在することが大前提として措定され、この探究心に基づき實驗を重視する學問がドイツで生じた、という論法が見られるわけである。その上で長井は、ドイツ民族のこのような「性格」を知るためにこそ、ドイツ語を知るべきであると論じるに至る。

長井の論述に於いては、直近のドイツ敗戦を直接取り上げることはなく、論の主題はドイツ自然科学（とくに化学）の進展を歴史的に述べるといふものであった。だが、この巻頭文を読む読者はにとって、ドイツの敗戦はまだ生々しい現実として心の中に存在していたであ

¹² 水野繁太郎については、掲載号の巻末「編輯局より」に於いて「本號には上智大學教授水野繁太郎氏が特に其意見の一端を御洩し被下候、氏が獨逸語學界のオーソリチーたる事は既に讀者諸君の熟知せらるゝ所」（p.32）と記されている。『独協学園七十五年史』（独協学園、1959年）に掲載されている「旧教員名簿」によれば、水野繁太郎は 1899～1901 年にかけて独協学園の教員をつとめている（同書 p.160）。

¹³ 長井長義については、掲載号の巻末「編輯局より」に於いて「帝國大學教授藥學博士理學博士ドクトル長井長義氏に懇請して高説を掲載致し候」（p.32）と記されている。WEB 版の「日本大百科全書（ニッポニカ）」及び WEB 版「ブリタニカ国際大百科事典小項目事典」によれば、長井はベルリンに留学、そこでドクター号を取得し、また夫人はドイツ人である。なお長井は獨逸學協會學校の第 6 代校長をつとめていて、ドイツ學關係者との關係も深かったものと思われる（『独協学園七十五年史』〔独協学園、1959 年〕pp.44-47 所収の「第六代校長長井長義」の項目を参照。なお同項目は子息長井垂歴山が執筆している）。

ろうし、一部の読者の中にはドイツ語学習を継続すべきや否や迷いを生じている者もいたかもしれない。このような状況の中で、長井の論は（そして先の水野の論も）、軍国ドイツにあらざる文明国・文化国・学術国としてのドイツこそがドイツの本質であるということ強調し、そのことにより読者を引き続きドイツ語学習に引きとどめておく効果をもたらしたものと考えられる。

本稿冒頭で、『獨逸語學雜誌』掲載の第一次世界大戦・日独戦争関係の記事が、必ずしも全て同じ方向性を有するわけではないと記したが、以下に紹介するいくつかの巻頭文は、ドイツ民族の優秀性云々という次元の話を持ち出すことなく、むしろ、復興するであろうドイツ、あるいは、よしや復興しなくとも探求するに価する国としてのドイツを前提とした上で、ドイツ語学習の重要性を訴えるものである。

まず紹介するのは湯原元一¹⁴の「獨逸文化の生命」という巻頭文である。ここで湯原はドイツ文化とドイツ軍国主義を截然と分けた上で、次のように言う。

「獨逸の軍國主義の滅亡を以て獨逸文化の滅亡であると考へるのは誠に淺薄と言はねばならぬ。（中略）講和の結果此國が國家としてはよし二流、三流に下る事があるとも自由の獨逸國は依然として否舊に増して文明世界を指導して行く事であらう（中略）國家の盛衰を見て直ちに其國の文化の輕重を問ふのは輕舉である、盛んなる英米の天地を見て英語のみを過重するは先輩の苦心に對しても濟まない譯である」（第21年第11号 p.1, 1919年7月）

湯原は國家の盛衰と文化の輕重が別物であることを主張しており、ドイツの現状の内部要素を二項対立的に分けて論を進めるという点に於いて、文化の国ドイツと戦争当事国ドイツを分けて論じる谷口秀太郎や、文と武を対比的に論じた水野繁太郎と、同じ思考法を持つものと言える。

湯原元一と同じく、ドイツの復興を前提にドイツの學術の發展を確信し、それゆえにこそドイツ語の學習が必要と論じるのは、巻頭文「獨逸語の必要」を執筆した畑良太郎¹⁵である。

「兎に角獨逸民族は必ず再び擡頭し來るべき民族であることは明かで、國家としての再發展は或は後るゝことがあつても學問技術の方面に於ける研究は今後も尚引續き偉大なる功績を擧げ得ることゝ信ずる。」（第21年第12号 p.1, 1919年8月）

畑良太郎の主張の中にも、國家としてのドイツと學問技術の國としてのドイツを分ける考えが示されている。政治的な面でのドイツの復興が遅れることがあっても、文化の面では必ず台頭するであろうという確信がここに見られる。

また巻頭文とは違う、一般記事（即ち日独両語で書かれた記事）の中にも、外部有識者の寄稿が見られ、そこでもドイツの復興への期待と、ドイツ語學習の重要性が指摘されている。三澤輔三郎¹⁶が寄せた「戦後の獨逸語及學術に就て」である。

¹⁴ 湯原元一については、当該巻頭文の氏名の前に「女子高等師範學校長」との肩書が付されている。湯浅元一は教育学者で翻訳書に『倫氏教育學』（金港堂、1893年）がある。この訳書 PDF を国会図書館デジタルコレクションから入手して調査したところ、原著者について「奥國の碩學リンド子ル氏」との記載があり(p.1)、またドイツ語から訳したことも記されている。このことから湯原元一がドイツ語に親しんでいたことが推測される。

¹⁵ 巻頭文の肩書には「特命全權公使」と記されている。また同号の「編輯局より」には、同誌に寄稿した畑良太郎への謝辞が記されているが、そこでは「特命全權公使」以上のことは記されていない。WEB版「20世紀日本人名事典」によれば、畑良太郎は駐ドイツ大使館参事官を経て、ブラジル、スウェーデン等の駐在特命全權公使を務めた。

¹⁶ 三澤輔三郎については、掲載号の巻末「編輯局より」に於いて「獨逸大使館の翻譯官たりし三澤輔三郎氏……が特に本誌の爲めに筆を取られしことは……」（p.32）と記されている。なお『獨協百年』第2号（獨協学園百年史編纂委員会、1979年）に掲載された「獨逸學協會會員名簿」（漢字は原文のまま）には、「本會員」の欄に「三澤輔三郎」の名が見え、住所として「麴町区永田町十一番地獨逸公使館」と記されている（同書 p.365）。『獨協百年』掲載の上記名簿資料については、その出典が『獨逸學協會雜誌』第49号であることが明記されているので、筆者もオリジナル資料確認のため同誌（マイクロフィルム版）の49号を調査してみたが、會員名簿は掲載されていなかった。名簿が別冊付録等でマイクロ

「獨逸國は再生の後全力を注いで學問と商工業の發展に勉むるであらう。そして獨逸國民は戰爭が獨逸經濟に及ぼしたる傷痕を恐らく可及的速かに恢復せんと努力し又其恢復も一般に信ぜらるゝより速に出来ることがあらう。(中略)故に平和克復后獨逸語の使用は最早日本國に於て不可能なりとの恐怖は全く無益の取越苦勞と言ねばならぬ¹⁷。／日本國は聯合國の一員として獨逸語を世界又は少くとも日本より放逐せんとする程の短見者でないことは我輩の所言するところ¹⁸である。」(第21年第10号 p.6, 1919年6月)

ここでは、もはやドイツ民族の本質や精神は論ぜられず、ドイツの復興(それもかなり速いスピードでの復興)を確信する立場から、ドイツ語学習の重要性が指摘されている。三澤はドイツ語の「放逐」という考えを「短見」と評しているが、これは裏を返せば、当時の日本に於いてドイツ語不要論を唱える人士がかなりいたことを推測させるものである。

さて、第一次世界大戦が終結して数ヶ月たつ頃から、有識者が『獨逸語學雜誌』に寄せる文章のトーンが変化し始める。即ちドイツが敗戦国であることに敢えて触れず、単刀直入に、いかにしてドイツ語をマスターすべきかという、いわば平時の議論が出始めるのである。

武者小路公共¹⁹の巻頭文「正確なる獨逸語を使へ」では、正確なドイツ語をマスターするために学習者はいかなる努力を傾注すべきかという、極めて実学的・実用的な議論が展開されていて、それまでの巻頭文執筆者のように、ドイツの文化や學術の優秀性を大上段に構えて議論するといった要素が殆ど消えている。

「外國語を學ぶ人に最も必要な事は言語を出来るだけ精確に體得するといふ點である(中略)殊に獨逸語の如き組織的な言語にあつては好い加減に覺えたり曖昧に使つたりすれば到底物に成りつこは無い」(第21年第13号 p.1, 1919年9月)

これは武者小路の巻頭文の冒頭部分と、それからしばらく後の部分から引用したものだが、一読の通り武者小路はドイツが敗戦国であることに触れず、またドイツ文化の重要性を論じてからドイツ語学習の必要性を説くといった方向性もなく、いきなり外国学習論から説き起こしている。そして武者小路は、とりわけ現地ドイツに行つて使用するに足るドイツ語をマスターするには、いかなる技術を身につけるべきか、という實用論を展開して、次のように言う。

「獨逸へ行く人も是から追々増加してくるであらうが是等の人々の爲めに参考に成る事を一つ二つ書いて見度い、(中略)彼方に行かうといふ人に注意したいと思ふのは第一に耳の學問をするといふ事である、先方のいふ事が理解出来るといふのは語學の習得上極めて重大である(中略)次には前に言つた曖昧な間に合せな言語を使用するのを避けて出来る限り精確な言語を使用する爲めに能く書いて見るといふ事である」(上掲引用と同頁)

要するに読者に対してリスニングとライティングを推奨しているわけで、ドイツ語の必要性はあたかも自明の前提とされた上で、具体的な学習方法が提言されている。しかも武者小路は、ドイツに行く日本人が増加することを予想してこれらの提言をなしており、ここでのドイツは、〈最近までの交戦相手〉というより〈訪問してコミュニケーションをはかるべき

フィルム化されなかつたのか、あるいは49号以外の号に掲載されていたのか、今後調査の課題としたい。

¹⁷ 「ならぬ」の箇所は、原文では「なぬ」となっていたが、脱字と判断し、訂正の上引用した。

¹⁸ 「ところ」の箇所は、原文では「とこ」となっていたが、脱字と判断し、訂正の上引用した。

¹⁹ 武者小路公共については、巻頭文の氏名の前に「外務省書記官子爵」との肩書が記載されている。WEB版「20世紀日本人名事典」によれば武者小路公共は東京帝国大学法科大学独法科の出身で、ドイツ大使館三等書記官等を歴任し、昭和の時代にはドイツ大使や日独協会会長になっている。また武者小路実篤の実兄。

国) という位置付けになっている。先に筆者は「平時の議論」という表現を用いたが、ドイツの敗戦という事実がそろそろ生々しい現実ではなくなり、ドイツ語を取り巻く環境が第一次世界大戦開戦以前の状態に復して来たと目されるのである。

5 おわりに

『獨逸語學雜誌』に掲載された文章は、本稿冒頭に示したように、その殆どが文法解説記事や各専門分野のドイツ語テキスト原文とその和訳であり、それに加えドイツ語入試問題の問題文と解答例など、ドイツ語学習のための実用的雑誌としての側面が非常に強い雑誌であった。そのような学習雑誌ではあるが、第一次世界大戦でドイツが日本の敵国となる、しかもそのドイツが最終的に敗戦国となる、という事態に遭遇して、いかに実用的学習を本旨とする雑誌とはいえ、その誌面の中でドイツ語に対し(あるいはドイツの国家や文化に対し)何らかの立場表明をなさざるをえなくなった。

本稿で見たように開戦当初は、敵国となったドイツの軍国主義に対する悲憤慷慨の気持ちが率直に表されたものの、青島戦終結後はドイツが敵国というより歐洲強国の一つという位置付けとなり、長い戦争がドイツ側の敗北という結末を迎えるや、『獨逸語學雜誌』では各界の著名人を動員してドイツ語学習の意義を喧伝するようになった。

こうして第一次世界大戦に於いて紆余曲折を経た『獨逸語學雜誌』であったが、前節で見た武者小路公共の論述あたりから、ようやくドイツの敗戦とドイツ語の重要性を同時に論じる(論じざるを得ない)という側面が希薄となって来た。1919年10月には、巻頭文として陸軍中将長岡外史の「獨逸俘虜に就いて」が掲載されるが、そこではもはや日本人読者に向けてドイツ語学習の重要性を訴えるという要素が全くなくなり、むしろ国内の捕虜収容所にいるドイツ人・オーストリア人に対して、日本人がどのように接すべきかということが、軍人の立場から述べられている。

「復讐仇打ちなどは一切思ひ切り美術、音楽、製造、工業、貿易、經濟其他一切の人事唯平和文明の爲めに發展進歩せしむる策を採用し侵略的軍國的の一切の考へを放擲するなれば(中略)兩國が此後の發展進歩を爲さんことを祈るの眞情を獨逸俘虜諸氏に依りて各々其の本國の全國民に傳へられんことを祈るものである」(第21年第14号 pp.1-2, 1919年10月)

長岡の巻頭文の末尾には括弧付きで「談話、文責記者」との注記が施されている。そして日本語文のあとに *Freie Übersetzung der Adresse Sr. Exz. General Nagaokas an die deutschen und österreichischen Kriegsgefangenen* と題されたドイツ語訳(大意をドイツ語訳したもの)が掲載されていて、ドイツ及びオーストリアの俘虜が長岡中将の談話内容の大意を直接ドイツ語で読めるような配慮がなされている。つまり、日本人読者にとっては長岡の日本語の大意をドイツ語で読んで和文独訳(抄訳)の方法を学ぶという活用の仕方があると同時に、ドイツ語を母語とする俘虜に対しては、日本政府(あるいは軍部)がどのような態度でこれに接するかについてのメッセージを直接ドイツ語で発信するという機能も併せ持つことになる。

俘虜に対するこのようなメッセージからも、『獨逸語學雜誌』の巻頭文に於いて、敗戦国ドイツの言語に対してどのように対応するかという議論がひとまず区切りを迎え、むしろ戦後処理の話題が掲載されるほどに、〈敗戦国の言語を学習する〉といったテーマが話題の中心から外れて行ったことが窺える。

以上、本稿では『獨逸語學雜誌』を手がかりに、第一次世界大戦開始から終結、及びその後のしばらくの時期について、ドイツ語学習雑誌がドイツ及びドイツ文化をどのように把握したのかを調査して来た。この時代には『獨逸語學雜誌』以外に様々なドイツ語学習雑誌が刊行されていて、筆者にとって、それらについての調査が今後の課題となろう。

ドイツ革命とゾルフ

—— 帝国の終焉から新生共和国へ ——

中村綾乃

1 はじめに

第一次世界大戦末期の1918年10月、マクス・フォン・バーデン (Maximilian von Baden) を宰相とする内閣が成立する。この戦時内閣において、現職の植民長官であったゾルフ (Wilhelm H. Solf) は外務長官に任命された。マクス公の回顧録によれば、ゾルフを抜擢した理由は以下の通りである。

まず一つ目の理由は、ゾルフ氏はその力強い演説の中で、道徳的な帝国主義と合意の上での平和の実現を標榜しており、敵国の耳目を惹くことができたからであった。二つ目の理由は、彼を任命することで植民地の法的権利を示威的に主張するためであった。「植民とはミッションである」はもともと彼の座右の銘であり、口先だけのことではなかったのである。彼はサモア総督、また植民長官としても模範となる人道的精神と堅実さを示しており、それは敵国でさえも認めるところであった¹。

1918年7月以降、ドイツ軍の前線は後退し、敗色は濃厚となっていた。8月、参謀本部のルーデンドルフ (Erich Ludendorff) は皇帝のヴィルヘルム二世 (Wilhelm II.) に休戦のための交渉を進めるよう迫った。前線にいた兵士の士気は低下する一方、国内では革命の機運が高まっていた。マクス公は早急に休戦交渉を進め、植民地問題で有利な条件を得るためにゾルフに白羽の矢を立てたのである。なおゾルフは、帝国の外務長官として、ツィンマーマン (Arthur Zimmermann) に次ぐ二人目の市民階級出身者であった。

マクス公内閣の成立から一月を経ずして、北部ドイツのキール軍港の水兵が蜂起し、ドイツ全土に暴動が広がっていく。11月9日、首都ベルリンで革命が勃発する。マクス公は皇帝およびプロイセン王としてのヴィルヘルム二世の退位を宣言し、多数派社会民主党のエーベルト (Friedrich Ebert) に政権を委ねた。エーベルトの要請を受けて、ゾルフは外務長官兼植民長官として留任する。しかし12月9日、独立社会民主党との対立をきっかけとして外務長官を辞任する。帝国最後であり、共和国最初の外務長官としての在任期間は二カ月であった。この間、ゾルフは連合軍との休戦交渉を担う一方、帝国から新生共和国への橋渡し役を務めようとした。

この橋渡し役としての経験と挫折は、ゾルフの政治構想にどのような影響を与えたのであろうか。本稿では、ドイツ革命時の外務長官としてのゾルフの事績を跡づけていく。ゾルフの事績を通して、植民地帝国としてのドイツ帝国、第一次世界大戦、革命から新生共和国へ、共和国の混乱と崩壊、日独関係を描くことが今後の課題である。

ゾルフに関する先行研究と史料について付記しておく。ゾルフが死去してから25年後、フィーチ (Eberhard von Vietsch) による伝記が刊行された²。この最初の伝記が世に出てから約40年後、ヘンペンストール (Peter J. Hempenstall) とタナカ・モチダ (Paula Tanaka Mochida) によって、二冊目の伝記が刊行された³。ゾルフの個人文書は、ドイツ連邦文書館に所蔵されており、フィーチによって史料目録が作成されている⁴。またフィーチは、ゾルフと元駐英大

¹ Max von Baden (2011), *Erinnerungen und Dokumente: Reihe Deutsches Reich VIII/1-II*, Hamburg: Severus Verlag, S. 36-37. マクス公の回顧録の初版は1927年に出版されたが、本稿では上記の復刻版を参照。

² von Vietsch, Eberhard (1961), *Wilhelm Solf, Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich.

³ Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T. (2005), *The Lost Man-Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

⁴ von Vietsch, Eberhard (1961), *Nachlass Wilhelm Solf (1862-1936)*, BArchK, N1053.

使のメッテルニヒ (Paul Wolff Metternich) の往復書簡を編纂している⁵。フィーチによって先鞭づけられたこれらの先行研究に依拠して、筆者は植民地行政官としてのゾルフの事績を跡づけ、彼の植民地構想を分析した⁶。

2 帝国の終焉

ヴィルヘルム二世の回顧録

革命から4年後の1922年、亡命先のオランダにいたヴィルヘルム二世は回顧録を出版した⁷。同書の「戦争の終結と退位」と題する章でゾルフが登場する。まず、ヴィルヘルム二世の回想に沿って、ゾルフとの対話を描き出していく。時計の針を1918年10月に戻してみよう。

謁見に訪れたゾルフに対して、ヴィルヘルム二世は米大統領のウィルソン (Woodrow Wilson) に宛てた覚書の草案について尋ねた。この覚書は、ゾルフが中心となって起草したものである。ゾルフの戦略は、ウィルソンを介して連合国との休戦交渉に持ち込むというものであった。ヴィルヘルム二世は、ウィルソン宛の覚書の草案についてゾルフから説明を受けた後、国内で皇帝退位の噂が広まっていることに言及した。ドイツの体面を傷つける新聞紙上の論調に対して、外務省として抗議するよう要求したのである。上述の回顧録には、この時の自らの葛藤とゾルフと交わした言葉が綴られている。

ゾルフは、それ (引用者註：皇帝の退位) について市中の街角で誰もが口にしておりますと、上流階級においても躊躇することなく議論しておりますと答えたのである。怒りを露にした私に対して、ゾルフは慰めの言葉を口にした。陛下が去るのであれば、彼もそうします、このような体制下で職務を遂行することはできませんと言った。自ら去るか、いっそのこと、この内閣によって失脚させられようか。しかし結局、ゾルフ氏は留まったのである⁸。

1922年10月31日付の大衆紙『ベルリン日刊新聞』*Berliner Zeitung am Mittag* は、この回顧録の論評を掲載している。この論評では、回顧録に記された内容、特にゾルフが登場する下りについて、真偽を確かめることはできないとしながらも、先に引用した「ゾルフ氏は留まった」という言葉の真意について次のように論じている。

ゾルフ氏は遠く隔たれた地 (引用者註：東京) におり、質問することができない。ただこの描写には、絶望的な状況の中で自らの地位を放棄する覚悟を見せた閣僚に慰められた皇帝の様子をみてとることができる。しかし、この悲劇が幕引きとなった後、国民のことはともかく、この大臣が留任したことを忘れるわけにはいかなかったのである⁹。

シッファー (Eugen Schiffer) は自叙伝の中で、ヴィルヘルム二世が知人に宛てた私的書簡を引用している。この書簡は1918年11月3日付である。この書簡の中で、ヴィルヘルム二世はゾルフを痛烈な言葉で非難している。

ただ私はこれまで60年生きてきて、そのうちの30年間は帝位に就いているのです。帝位こそ、私に与えられてしかるべきものです (中略) そして経験！誰が私の代わりをすべきなのでしょう。あの悪評高きマクス・フォン・バーデン？ (中略) 彼らとは、目下話し

⁵ von Vietsch, Eberhard (1964), *Gegen die Unvernunft: Der Briefwechsel zwischen Paul Graf Wolff Metternich und Wilhelm Solf, 1915-1918*, Bremen: Carl Schünemann Verlag.

⁶ 中村綾乃 (2017年) 「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層—混合婚をめぐる議論を起点として」工藤章・田嶋信雄編『ドイツと東アジア 1890-1945年』東京大学出版会; 中村綾乃 (2019年) 「ゾルフと第一次世界大戦—城内平和と懐疑、植民地の回復—」言語文化共同研究プロジェクト 2018『言語文化の比較と交流 6』大阪大学大学院言語文化研究科。

⁷ Kaiser Wilhelm II (1922), *Ereignisse und Gestalten aus den Jahren 1878-1918*, Leipzig: K. F. Koehler.

⁸ Kaiser Wilhelm II (1922), S. 237.

⁹ *B.Z.am Mittag*, 31. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

合いをしてはいますが、何度も退位するよう進言してくるのです。彼らは頭でっかちで、誰も本当のところ何をしようとしているのかわかっていないのです。もちろん、何人かは頭のいい者もいます。たとえばあのダヴィット、彼はとても思慮深い人で、ユダヤ人ではありません。違います、違いますとも。彼は兄弟のような交わりを結ぶこともありませんでしたし、またコスモポリタンの思想とは無縁です。でも彼はとても頭が切れます。あのギースベルツ、カトリック系の労働者協会の指導者であった人物です。このような人々とは一緒にやりやすく、有難いのですが、問題は他の面々です。首脳陣のマクス・フォン・バーデンをトップにして。私が出会った中で、もっともお粗末で嘆かわしく女々しい奴こそ、あのゾルフです¹⁰。

この書簡の末尾では、「前線で戦う兵士を見捨てて退位するなど論外」と綴っている。ヴィルヘルム二世は退位を促す閣僚や側近に不信を募らせ、憤っていた。また行間からも読み取れるように、通俗的な反ユダヤ陰謀論に囚われていた。なお、この書簡を引用しているシッファーは民主党の創設者の一人であり、マクス内閣では蔵相を務めた人物である。

ゾルフの証言

後に戦間期として位置づけられる 1920 年代、ゾルフは駐日ドイツ大使としての任務に就いていた。この間、東京にいたゾルフのもとにはドイツの新聞社や出版社から回顧録の執筆依頼が舞い込む。しかしゾルフは、ドイツ大使という現職にあること、また 1918 年の革命を総括するには時期尚早という理由から回顧録の出版を断った。

1929 年 5 月、駐日大使の任務を終え、外務省を辞職したゾルフのもとに『ドイチュ・アルゲマイネ・ツァイトウング』*Deutsche Allgemeine Zeitung* から原稿執筆の依頼があった。同紙では、「あなたが回顧録の中で書かなかったこと！」と題する特集号を組んでおり、第一次世界大戦の終結と革命に関する証言を集めていた¹¹。同紙の編集者からの原稿執筆の依頼に対して、ゾルフは固辞する方向で意志を伝えた。

私は数々の貴重な記録や文書、公文書のみならず私的なものも集めており、私の書いた草稿や手記なども保管しています。これらの文書が現代史の記録としてどれほどの価値があるか、歴史が示すことになるでしょう。私はまだ何もこれらの記録を公にしません。私自身に対する非難に対して、いっさい抗弁してきませんでした。(引用者註：これまでに出版されたドイツ革命に関する)回顧録の大半は 1918 年当時にもう執筆されていたものなのです。これらの回顧録ははっきりとした意図があって書かれているのです。「それは私ではなく、他の誰かです！」と言っているのです。私はこのような回顧録の著者たちと同列に並べられることを恐れています。遅かれ早かれ、私は 1917 年から 19 年にかけての苦難について書いたものを出版するつもりです。その苦難とはわずかの少数派が耐え忍ばなければならなかったものです。今のところは回顧録の執筆に従事したくはなく、まだ元気であるうちは、この時代の機織り機の中で仕事をしたいと思っています¹²。

この時点では回顧録の出版は見送られたが、いずれ出版することを見込み、書簡、日記やメモ、講演記録を保管していた。上述のメッテルニヒと交わした往復書簡を書籍化し、出版する準備も進めていたのである。

1922 年 10 月、一時帰国中のゾルフは知人の政府高官ハイルブロン (Friedrich Heilbron) に宛てた書簡において、連合国との休戦交渉と退位をめぐる皇帝との対話、革命後も外務長官

¹⁰ Schiffer, Eugen (1951), *Ein Leben für den Liberalismus*, Berlin: Herbig, S. 136; Vietsch (1961), S. 213.

¹¹ Klein an Solf, Berlin 4. Mai 1929, BArchK, N1053-12.

¹² Solf an Klein, München 15. Mai 1929, BArchK, N1053-12.

に留任した経緯を記している。この書簡の記載に沿って、再び時計の針を1918年10月に戻し、ゾルフと皇帝の対話を描き出してみよう¹³。

1918年10月5日から革命の日となる11月9日までの約一カ月の間、ゾルフがヴィルヘルム二世と会い、言葉を交わす機会があったのは三回であった。ゾルフの記憶によれば、一度目は10月8日か9日、二度目はそれから数日後、三度目は二度目に会ってから数日後である。一度目の対話は、自宅から目と鼻の先にある外務省に向かう際、皇帝と偶然すれ違ったために実現した。その際、ヴィルヘルム二世は戦況について楽観的な見通しを述べた。連合国との休戦交渉が難航しているにもかかわらず、現実離れした発言を繰り返す皇帝にゾルフは失望する。この時、ストリンドベリ (Johan August Strindberg) の戯曲に登場するインドラの娘の「人間は何と気の毒な存在か」という台詞がゾルフの頭をよぎった。

二度目の対談は、オイレンブルク伯 (August zu Eulenburg) の邸宅で行われた。ヴィルヘルム二世他、オイレンブルク伯、数名の閣僚が同席する場で、ゾルフはウィルソンとの交渉について説明した。説明の後、ルーデンドルフとヒンデンブルク (Paul von Hindenburg) を引き離す必要があると述べた。ただし、国民的な人気の高いヒンデンブルクを罷免すれば社会的な波紋が広がるため、ルーデンドルフのみの罷免をヴィルヘルム二世に進言したのである。

二度目の対談の数日後、ゾルフとヴィルヘルム二世はベルビュー宮殿で会す。これが三度目の対談であり、ゾルフにとって最後の皇帝謁見となった。この三度目の対談において、ゾルフはヴィルヘルム二世に退位を促したのである。謁見に訪れたゾルフに対して、ヴィルヘルム二世は開口一番、次のように述べた。

私に感謝しなければなりませんよ。というのも、あなた方の要求をかなえてあげたのですから。作戦は遂行しました。私があああのシャム双生児 (引用者註：結合双生児) を引き離したのですよ。ルーデンドルフを罷免して、ヒンデンブルクを留任させました。さあ次は、あなた方が皇帝を支える番です¹⁴。

ヴィルヘルム二世に自ら退位するという考えはなく、再び休戦交渉が遠のいたことを知り、ゾルフは落胆する。その時の心情を次のように綴っている。

シャム双生児！私たちは皇帝を支えなければならないのです。確かにその通りですとも！ずっとそのつもりでやってきたのです。マクス公も彼の側近にしたってそうです！皇帝の一連の言動から、この内閣が皇帝派として、ホーエンツォレルン家の帝位の継続とドイツ帝国の利益のためになさなければならないと思ってやってきたことを、陛下はわかっていたのです。またマクス公がそのために一貫して尽力してきたことも正当に評価されず、不愉快にしか思っていなかったことが露呈したのです¹⁵。

さらにヴィルヘルム二世は、ミュンヘンにいたプロイセン公使トロイトラー (Karl Georg von Treutler) から届いた電報をゾルフに見せた。その電報は、ミュンヘンにおいて皇帝の退位を求める声が高まっていることを伝えるものであった。この電報をめぐる対話の中で、ゾルフは引導を渡すかたちで皇帝自ら退位するよう促した。このハイルブロンに宛てた書簡の中では、二人の対話が戯曲の台本のように再現されている。

皇帝：これはミュンヘンにいる私の公使が寄こした電報で、バイエルンでは私の退位を求める声が高まっていると書かれているのです。前代未聞です。このフォン・トロイトラー氏を厳しく叱責していただきたい。

私：どうか陛下！謹んでお願い申し上げますが、彼を叱責するというような命令を取り消して下さい。この厳しい状況の中で、フォン・トロイトラー氏は彼の任務を

¹³ Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111. この書簡は、フィーチの伝記の付録にも収められている (Vietsch (1961), S. 377-381)。

¹⁴ Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

¹⁵ Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

全うしたのです。彼は陛下に地方の世論を伝えずにはいられなかったのです。このような電報を打つこと自体、彼にとって苦渋の決断だったのです。

皇帝：私にどうしろというのですか。私は軍人であり、塹壕を見捨てて去っていくことなどできません。そんな馬鹿なことが。このテーブルにある数々の電報を御覧なさい。デルブリュックが見せてくれたもので、津々浦々から送られてきたものです。誰もが私に忠誠を誓っています。国民は私に忠義を尽くしているのです。

私：陛下、お言葉ではありますが、バイエルンだけではなく、プロイセンでも多かれ少なかれ、そのような声は高まっているのです。ここ数日、我が外務省は皇帝の退位に関する論争をベルリンの新聞が報じないようにさせるために手を尽くしました。

皇帝：なぜ、人々は私の退位を望んでいるのですか。

私：ウィルソンからの最後の覚書の後、国民全体に不安が広がっています。陛下とともに不利益を被ることになるのか、あるいは陛下なしで平和を享受することになるのか誰もが不安なのです¹⁶。

この対話の最後にヴィルヘルム二世は言葉を発するが、その言葉の中身についてはゾルフ自身の胸の内に留めておきたいとし、この書簡では明かしていない。

外務長官としてのゾルフの任務は、ウィルソンを介して連合軍との休戦交渉を進め、ドイツに有利な条件を引き出すことであった。まずゾルフはルーデンドルフ独裁と揶揄された状況を解消し、政治主導を対外的にアピールしようとした。10月24日の閣僚会議の席において、「ルーデンドルフの罷免は米国に好印象を与える」とし、ルーデンドルフの罷免を求め、ヴィルヘルム二世に進言したのである¹⁷。さらなる体制一新のアピールはヴィルヘルム二世の退位であった。ゾルフは当初、英国をモデルとした立憲君主制を念頭に入れていた。皇帝の退位をヴィルヘルム二世の代に留め、新たに即位する皇帝の政治的権限を制限して、君主制を維持しようとしたのである。しかし、プロイセンの王室を含めた国家制度の一大改革となるため、一朝一夕に結論の出る問題ではなかった。何よりもヴィルヘルム二世自身が皇帝並びにプロイセン王の地位に執着し、退位を拒んでいたのである。

ベルリンで退位をめぐる綱引きが続く中、ヴィルヘルム二世は前線を視察するという名目で大本営が設置されていたスパーに向かった。11月8日、マクス公はスパーにいるヴィルヘルム二世に対して、即刻退位することを求める最後通牒となる電報を打った。この電報の文面はゾルフが原案を起草した。原案の文面は、「内乱を回避できるか否か、陛下の即時決断にかかっています」というものであった¹⁸。

マクス公の回顧録

マクス公が退位を迫る最後通牒の電報を送った翌日の11月9日、ヴィルヘルム通りに赤旗の小旗を掲げたトラックの列が現れた。マクス公の回想に沿って、革命の日となった11月9日に時計の針を合わせ、官邸の動向を追ってみよう。

午前10時、ベルリンの街頭で労働者を中心としたデモが起り、デモの波は官邸と帝国議会のある中心地に迫りつつあった。デモに参加していた人々は、「仲間たちよ！撃つな！女性や子供を優先しろ」と書かれたプラカードを持っていた。しかし一部には暴徒化した者もあり、兵士もデモに加わっているという報告が官邸に入った¹⁹。午後11時、マクス公はスパーにいるヴィルヘルム二世に連絡を試みるが、結局本人からの承諾を得られないまま、皇帝の退位を宣言する声明を出した。

皇帝ならびに王は退位することを決断しました。ドイツ帝国皇帝およびプロイセン王の退位と政権移行に伴う問題が解決するまで、帝国宰相はその地位に留まります。エーベルト議

¹⁶ Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

¹⁷ Vietsch (1961), S. 206.

¹⁸ Vietsch (1961), S. 210.

¹⁹ Max von Baden (2011), S. 359.

員を宰相に任命し、憲法制定のための国民議会の開催に向けて、速やかな選挙告示のための法案を提示する予定です（後略）²⁰。

正午、このマクス公の声明がヴォルフ通信社（W.T.B.）を通して報じられた。それからまもなく、エーベルト（Friedrich Ebert）率いる多数派社会民主党の代表団が官邸を訪れた。マクス公の他、副宰相のパイアー（Friedrich von Payer）、ロデルン（Siegfried von Roedern）、ハウスマン（Conrad Haußmann）、ベルンシュトフ（Heinrich von Bernstorff）、ゾルフが同席し、代表団との会談が行われた。まずエーベルトが口火を切り、「無血革命による政権移行」を強調した。さらに、新政権の派閥構成と人事について次のように述べた。

独立社会民主党が新政権に加わるかどうかについては、まだ彼らの見解が一致しておりません。独立社会民主党が加わることを決めた場合、我々は受け入れるつもりであり、連立を要請することになるでしょう。また我々は、市民階級の意向も受け入れることに異論はありませんので、せめて政府組織の大枠を保持する必要があります。これについてはまだ話し合いが必要でしょう²¹。

このエーベルトの言葉に一縷の望みをつないだマクス公は、摂政制度という案を持ちかけた。退位をヴィルヘルム二世個人の問題に留め、新たに即位する皇帝の代から摂政制度を採り入れ、君主制を存続させようとしたのである。

この会談に同席していたゾルフは、マクス公に発言許可を求め、エーベルトに対して質問を投げ掛けた。まず憲法に則って政権を率いる心構えを確認し、その上で君主制の存続についての意向を聞いたのである。このゾルフの質問に対して、エーベルトは次のように答えた。

昨日、同じ質問を受けていたならば、迷うことなく存続するつもりだと答えていたでしょう。しかし今日となつては、まず仲間たちと協議しなければなりません²²。

マクス公が「（君主制の存続が約されていないのであれば）摂政制度という案もなかったことにする」と述べると、エーベルトは「それはもう手遅れです」と答えた。そしてエーベルトの背後で党員が声を揃えて「手遅れだ、手遅れだ」と叫び、シュプレヒコールが起こった²³。エーベルトはブルジョワ陣営の政治家を排除せず、官僚機構の温存を約していたものの、独立社会民主党の政府への参加が不透明であったために、マクス公から切るカードは限られていった。

午後二時、多数派社会民主党のシャイデマンが帝国議会の前に集まる群衆に対して、共和国の樹立を宣言したという一報が入った。この宣言はシャイデマンのスタンドプレーであり、多数派社会民主党としての宣言ではなかったものの、君主制の存続という可能性は遠のいた。このシャイデマンの宣言が報じられた後、エーベルトは二つの告知を行った。一つ目はドイツ市民に向けた告知で、現宰相マクス公から宰相としての業務を委任されたことを伝えるものであった。二つ目の告知は、官庁と役所、官吏に向けた告知であった。

ドイツ国内の紛争と食糧危機が広がるのを防ぎ、正当な権利としての自主的な意思決定権を貫徹すべく、新政府が政権を担うこととなりました。州都市の官庁と役所、官吏の助力があつてこそ、新政府はこの任務を果たすことができます。国政を担うこととなった新しい面々と一緒に働くのはさまざまな問題が伴うでしょう。しかし、彼らの国民に対する愛に訴えたいと思います。国難にあるこの時、一つでも組織が欠けてしまったら、ドイツは無政府

²⁰ Max von Baden (2011), S. 363-364.

²¹ Max von Baden (2011), S. 364.

²² Max von Baden (2011), S. 368.

²³ Max von Baden (2011), S. 368.

状態となり悲惨なことになるでしょう。辞めるといふ時が来るその瞬間まで、恐れることなく辛抱強く各々の職務を全うすることで、ともに祖国を助けていただきたいのです²⁴。

午後5時過ぎ、宰相を辞任したマクス公は官邸を去る前、エーベルトに別れの挨拶をした。マクス公の回顧録には、エーベルトと交わした言葉が綴られている。

エーベルトは私にこう言った。「貴方には何としても残ってもらわなければなりません」と。私は問うた。「どのような目的で残るのでしょうか」と。するとエーベルトはこう言った。「貴方には、統治代行者として残ってもらいたいです」と。最後の瞬間まで一緒にやってきた側近たちからもこのような要請はあった。しかし私はエーベルトにこう答えた。「貴方は独立社会民主党と協定を結ぶつもりでしょう。私は独立社会民主党と一緒にやっていくことはできません」と。扉に向かって歩きながら、もう一度私は彼を振り返った。「エーベルトさん、この国のことをよろしく願います」と言うと、彼は「この国のために私の息子二人が戦死したのです」と言った²⁵。

臨時政府としての人民委員政府を率いたエーベルトは穏健派の社会民主主義者であり、当初から無血革命による政権移行を強調していた。交渉によっては、君主制を存続することも可能であったにもかかわらず、ヴィルヘルム二世が皇帝およびプロイセン王としての地位に固執したことで時機を逸することとなった。憲法を改正し、皇帝の権限を制限した上での立憲君主制への移行はゾルフの構想とも重なるものであった。また、革命の急進化に歯止めをかけ、ポリシェヴィズム革命への転化を防ぐという点においても、エーベルトとゾルフが描いた革命後の青写真は同じものだったのである。

3 新生共和国

閣僚の留任

マクス公からエーベルトへと政権移行が実現し、多数派社会民主党と独立社会民主党は連立政府を組織することとなった。多数派社会民主党からはエーベルトとシャイデマン、ランツベルク (Otto Landsberg)、独立社会民主党からはハーゼ (Hugo Haase) とバルト (Emil Barth)、ディットマン (Wilhelm Dittmann) が選出された。

エーベルトの要請に従い、ゾルフを含めた旧政権の閣僚の大半は留任することとなった。新生共和国の人民委員政府に協力した理由について、先述のハイルブロンに宛てた書簡の中で明かしている。この書簡の日付は、1922年10月9日である。

30年以上にわたり私は官職にあり、そのキャリアは皇帝ヴィルヘルム二世統治下のもので、30年以上にわたり皇帝に仕えてきたのです。植民地総督として、また植民長官としても陛下からたびたび援助の手を差し伸べていただき、寵愛と恩恵を受けていたのです。そのような私ですから、革命政権を手放しで歓迎して鞍替えしたわけではないのです。超過激派に譲歩しないために、そして崩壊を食い止めるために当初の助言に従い、外務省の官僚とともに人民委員政府に協力することにしたので²⁶。

11月革命から13年後の1931年、メッテルニッヒに宛てた書簡の中で、スパルタクス団の権力掌握を阻止し、革命の急進化を防ぐために外務長官として留任したと説明している。この書簡は1931年10月29日付である。

1918年の秋から冬、あの散々な日々のごことは貴方もよく覚えておられるでしょう。伝統を守り、関連している交渉を継続するために、エーベルトは私に外務省に残ることを要請しました。その際、私は外務省の幹部を招集して会合を開きました。私が留任するのであればともに留まり、私が辞任するのであればともに辞めたいという意見で一致しました。あの時私

²⁴ Max von Baden (2011), S. 373.

²⁵ Max von Baden (2011), S. 374.

²⁶ Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

が辞任していれば、帝国とプロイセンの政府閣僚は皆辞めたであろうし、彼らとともに指導的地位にあった官吏も一斉に辞めていたかもしれません。スパルタクス団は、すべての官庁を掌握するべく綿密な計画を立てていたのです。そのスパルタクス団が官庁の組織を破壊することを阻止したのではないのでしょうか。あの時、多くの保守派と宮廷派は私に感謝していました。ヴィルヘルム通りで、ある名の知れた貴族の女性は私に抱擁して感謝の意を示したほどです。あの時の風潮はそうだったのです²⁷。

この書簡を認めていた 1931 年、翌年に控えた大統領選の候補としてゾルフの名前が挙がっていた。当初、現職大統領のヒンデンブルクは高齢のため出馬が難しいとされていた。ヒンデンブルクの支持層であるブルジョワ陣営の政治家と退役軍人は、ゾルフを支持することが見込まれていた。この時のゾルフは、帝国の閣僚が共和国派に寝返ったという批判を避けるべく、革命の急進化を防ぐための防波堤としての役割を強調し、保守派の支持を獲得しようとしていたようである。

1918 年 11 月、帝国を率いてきた閣僚の留任が決まると、人民委員政府の首脳陣からゾルフの退陣を求める声が挙がった。またゾルフは、バイエルンの独立社会民主党を率いたアイスナー (Kurt Eisner) から反革命分子というレッテルを貼られた。アイスナーは、ゾルフのような帝国期の重鎮が留任することで、労働者・兵士レーテの権限が制限され、反革命につながるとし、閣僚人事の刷新を求めた。このような左派からの横やりを遮り、ゾルフの留任を求めたのはエーベルトであった。上述のハイльブロンに宛てた書簡の中で、ゾルフはエーベルトと交わした約束について明かしている。

我々の政治的信念が尊重され、良心に反する行為を強制されないことを条件に留任したのです。これはあの時、エーベルトが約束してくれたことです。この約束は未だに破られていません。前の政府に忠実に仕えてきた官僚が新しい体制のために尽力すること、これを無節操というのは間違いです。かつての体制が崩壊したのは新しい政府の責任である、あるいは今ひどい生活環境に陥っているのは、新しい統治者による愚策の結果であると信じているような者は、我々が 4 年にわたり困難と闘い、史上かつてないほどの凄まじい戦争に負けたということを忘れてしまっているのです。はたから見てだけで、不平を言うのは愚かなことです。我々は一丸となってこの政府を支えていかなければならないのです。新しい形を好むと好まざるにかかわらず、全体のためにそうすべきなのです。共和国か君主制かという問題ではなく、ドイツという国の問題なのです²⁸！

人民委員政府と労働者・兵士評議会の二重権力状態、人民委員政権内部からの批判により、ゾルフは連合国との交渉の舵取りができなくなっていく。人民委員政府の中でも、穏健革命派の多数派社会民主党と急進派の独立社会民主党の軋轢が露呈していた。革命の急進化により、バイエルンやラインラントの分離運動が起こり、ドイツは内戦勃発の危機に晒された。

1918 年 11 月 17 日、ゾルフはエーベルトに宛てた書簡を認め、ベルリンの人民委員政府と労働者・兵士評議会の二重権力、これに起因する混乱に策を講じるよう求めた。またゾルフは、ミュンヘン革命を率い、バイエルン自由州の暫定首相となったアイスナーに対して、中央政府として抗議するよう求めた。

革命は、ドイツ問題に対するビスマルク的な解決策が及ばないところまで来ています。連邦議会がこのままの形であれば、もはや存在する意味はありません。中央政府とプロイセン政府の関係も同様です。というのも、もはやプロイセンは国家の主導権を握っていないのですから。主導権を復活させることなどできません。なぜなら、二つの議会制度のもとに一つの政府が機能することなどできないのですから。前提となっていた憲法の形は崩壊しました。これまでの憲法のお飾り的な部分のみならず、土台から粉々に打ち砕かれたのであり、国家という建物全体を新しく建て替えなければならない、そのような状況にあるのです。(中略)連邦国家という解決策をとった場合、難しいのは、それだけで全ドイツ人の半分をまとめあげている大きなプロイセンの問題です。50 年代のラドヴィッツ案に沿って、

²⁷ Solf an Metternich, 29. Oktober 1931, BArchK, N1053-85.

²⁸ Solf an Heilbron, Drensteinfurt 9. Oktober 1922, BArchK, N1053-111.

プロイセンの自治を限りなく独立に近いものに拡大できるかどうか、同時に南ドイツの州の独立を限りなく自治に近いものに引き下げるべきかという問題を提起し、議論しなければなりません²⁹。

ゾルフは連合国との休戦交渉を進める上で、ドイツという国家の範囲と制度が明確ではない現状を訴えた。また、連邦国家の中でのプロイセンの位置づけとオーストリアとの合邦の可能性についても、翌年に開催される憲法制定議会に向けて議論するべきとしている。講和条約の締結後、オーストリアとの合邦、すなわち「大ドイツ」への拡大も選択肢の一つとなるように法的な土台を整えておくべきと考えていたのである。

「ドイツの終わり」

革命後の方向性について多数派社会民主党、独立社会民主党、スパルタクス団、それぞれが異なる青写真を描いたまま混乱が続いた。1918年11月25日、議会の壇上に立ったゾルフは演説を行った。なお議場にいたコッホ＝ウェザー (Erich Koch-Weser) は、この11月25日のゾルフの演説は「アンシャン・レジーム」を彷彿させるものだったと日記に記している³⁰。

一定の世代の人々は、ドイツ国民の敗北という結果を乗り越えるまでには至らないのです。革命をもたらす転換は、まさに国民としてのドイツ人と一国の経済に深刻な影響をもたらそうとするものです。(中略)皆様、私は革命を非難しているわけではありません。というのも私は、革命が作り上げたドイツ共和国の幸先のよい未来を信じているからです。私の提案によって、最近よくそういわれるのですが、革命の成果が台無しになる、そのような結果を望んではおりません。私は、ドイツの統一が気泡に帰してしまうのではないかと心底懸念し、危惧しながら、あなた方に訴えているのです。皆さま、ドイツの未来はあなた方の手に託されています。崩壊の危機に瀕したドイツが統一できるのか、平和を達成できるのかは、あなた方の決定にかかっているのです。ドイツの統一と平和の達成、この二つの大きな課題があなた方の目前に突きつけられているのです。今なきなければならない施策を先送りするようなことがあれば、崩壊の危機に瀕したドイツに未来はなく、あなた方の話し合いに委ねられたこの国の歴史は、「ドイツの終わり」(Finis Germaniae)という言葉で終止符を打つことになるでしょう³¹。

ゾルフは、革命の急進化に警鐘を鳴らし、ポリシェヴィズム革命への転化を阻止し、連合国との交渉を進めていこうとした。そのために、自らが率いる外務省の独立性を確保することを提言した。人民委員政府のメンバーが水面下でソ連との関係を深めていることを警戒し、牽制していた。ソ連のポリシェヴィキとの蜜月は社会主義革命の呼び水となり、米国や英国、フランスとの関係悪化を招き、来るべき講和条約の締結にも影響を及ぼしかねないと考えていたのである。

この演説から約2週間後、1918年12月9日付のエーベルト宛の書簡において、ゾルフは人民委員政府のメンバーとソ連との癒着を糾弾し、事実確認を求めた。

ヴォルフ通信社の告発記事によれば、元駐ベルリン公使である人物がポリシェヴィキのプロパガンダ誌を配布しています。この雑誌の配布のみならず、武器の調達まで考えているのです。このプロパガンダ誌が独立社会民主党を介して広まっているかどうか、調査して下さい。先述の報道によれば、武器の購入について、自動拳銃が159丁、ブローニング式自動小銃と自動装填式拳銃が合わせて28丁、この他に銃弾約2万7千とされているが、この数は正確ではありません。ここで報じられているのは、ロシアへの輸出分のみです。ご承知の通り、買い付けて、現在大臣職に就いているバルトに引き渡された分の方がその数をはるかに上回ります³²。

ルーブル通貨によってドイツ革命が進展しているのが事実であれば、見過ごすことができないとし、ゾルフはエーベルトに詰め寄った。また、ポリシェヴィキと人民委員政府のメンバーの結びつきを示す証拠となる電報を入手し、エーベルトに示した。その電報は、ソ連外相のチチェーリン (Georgy

²⁹ Solf an Ebert, Berlin 17. November 1918, BArchK, N1053-59.

³⁰ Vietsch (1961), S. 224.

³¹ Schluß der Rede des Staatssekretärs Dr.Solf auf der Reichskonferenz, 25. November 1918, BArchK, N1053-59.

³² Solf an Ebert, Berlin 9. Dezember 1918, BArchK, N1053-60.

Chicherin) が送信者となっており、宛先はハーゼとバルトであった。この電報には、革命が成功したことに対する祝辞とともに、ハーゼとバルトにソ連の人民委員会議から財政的援助がなされたことが書かれていた。エーベルトはハーゼを官邸に呼び、この電報の真偽を確かめた。官邸において、エーベルトとゾルフ、ハーゼが対面し、ゾルフがチチェリンからの電報を読み上げた。顔色を変えたハーゼは、このような場合は公正な審議の原則に反すると怒鳴ったが、電報に記載されている内容については否定しなかった。ゾルフはハーゼとバルトの解任を求めたが、エーベルトは躊躇した。解任の要求が受け入れられなかったことに失望し、この日の帰宅後、ゾルフは自室で辞表を認めた。

エーベルトと袂を分かつことになったのはゾルフにとって痛恨の極みであり、「数週間前のマクス公との決別よりも、はるかに辛いもの」であった。10年後の1928年8月28日、ゾルフはエーベルトに辞表を突きつけた時のことを振り返っている。

こうして私は官職を去ることとなりました。エーベルトと最後に衝突したことで、辞めざるを得なかったのです。彼のような素晴らしい人と一緒に働きたいと思っていただけに、悲しみもひとしおでした。当時、独立社会民主党なしではエーベルトはやっていけなかったのです。まだあの時は、彼らと一緒にやっていくのは無理で、耐え難い状況だということに気づいていなかったのかもしれませんが。このようなことは人間関係にはよくあることで、私に身を引かせるしかなかったのです。それでもエーベルトとの交友関係は続きましたし、駐京ドイツ大使に任命してくれことに何よりも感謝しているのです³³。

ゾルフが辞任を表明し、エーベルトに宛てた辞任届を認めたのが12月9日、この辞任届が受理されたのが12月13日であった。帝国最後であり、同時に共和国最初の外務長官の在任期間は約2か月であった。しかし、ゾルフはエーベルトと決別したわけではなかった。辞任届を出した翌日の12月10日、エーベルトに宛てて私信を認めている。この書簡の中では、ロシア革命を引き合いに出して人民委員政府の問題点を指摘している。

ケレンスキーが中心となった革命は、机上の学問や議会で重きを置いていたゆえ、機を逸してしまっただけです。閣僚も憲法制定議会も労兵レーテを追いやることはできなかったのです。レーニンがラディカリズムのみならず、独裁という論理をもって、ケレンスキーに勝ったのです。最初に樹立した革命政府が、憲法制定議会と並んだ、あるいは上位にある臨時的な憲法によって、暫定的な大統領を選んでいたら、ポリシェヴィズムはロシアで必要とされることすらなかったでしょう³⁴。

ゾルフの辞任を引き換えとして、エーベルトは独立社会民主党に譲歩するかたちとなった。しかしゾルフの辞任から一週間後、ベルリンに駐屯していた人民海兵団の暴動の鎮圧をめぐって独立社会民主党と対立し、独立社会民主党員のメンバーは人民委員政府から離脱した³⁵。

4 新党の旗揚げ

11月革命から一年後の1919年11月11日、ベルリンを離れていたゾルフはメッテルニヒに宛てた書簡の中で、左右両翼に揺さぶられる続ける共和国政府の現状を分析している。

なかんずく、今の政府は大衆を支配する力はなく、多数派社会民主党の支持者すら意のままにできずにいます。おそらくは、左傾化に歯止めがかからないのでしょう。革命派の急進主義者は自らカードを切ったのです。去年の11月9日、エーベルトが王子(バーデン公マクス)に放った言葉を今もはっきりと覚えています。「今の政権は国民の信頼を失っています。お言葉ですが、私は信頼を得ています」と言ったのです。今や、その信頼はどこへ行ってしまったのでしょうか。豪華な空間でフロックコートをつけた労働組合のリーダーは大衆を遠ざけてしまったのです。ただ、そのような彼であっても市民の輪の中に馴染んでいく勇氣はないのです。一方、右寄りの民主主義を標榜する者からは、帝政を崩壊した者として嫌われているのです。私からしてみれば、彼は大してぶれてはいません³⁶。

³³ Vietsch (1961), S. 381-382.

³⁴ Solf an Ebert, Berlin 10. Dezember 1918, BArchK, N1053-59.

³⁵ ゲルヴァルト, R. (大久保里香・小原淳・紀愛子・前川陽祐訳) (2020年)『史上最大の革命』みすず書房、242-245頁。

³⁶ Solf an Metternich, Zingst b. Nebra Bez. Halle, 11. November 1919, BArchK, N1053-140.

さらにビスマルクからベートマン＝ホルヴェーク(Theobald von Bethmann Hollweg)、マクス公、ヘルフェリヒ(Karl Helfferich)、エーベルトまでの政治家を総括した上で、語気を強め、自らの政治構想を語っている。

民主主義への入り口に私は立っているのです。けっしてたやすいことではありませんが、今まさに私は骨の髄まで民主主義者であるという意識を持っています。しかし、それは政治的な表明ではなく、世界観の問題なのです。(中略)帝政期の同僚の大半が私の手本に従っていてくれたならば、民主党が大所帯の中道市民政党となっていたかもしれません。社会民主主義の急進化に抗うためには、そのような政党が必要だったのです。デルブリュック、ヴァーンシャッフエ、カルドルフ、ポサドウスキー、カールともども勢ぞろいで民主党に結集すればよかったです。しかし残念なことに、もはや民主党は私が描いていた青写真とは異なるものになってしまいました。それにフリードリヒ・ナウマンも亡くなってしまいました。ここに名前を挙げた面々は、それぞれの政党に不満を募らせており、感極まった党員の議場での発言、ドイツの新聞と日刊紙の紙面に飾られる文言に恐々としなければならないのです³⁷。

ゾルフはメッテルニヒに対して、旧帝政派のマクス公やベートマン＝ホルヴェークから穏健な社会民主主義者のエーベルトまでの受け皿となるべき中道政党の必要性を説き、自ら主軸となって新党を旗揚げする覚悟を明かしたのである。

1922年10月、駐日大使であったゾルフは、ドイツでの休暇を終え、米国経由で日本へ戻ることとなった。ワシントンでは、米国大統領のハーディング(Warren Harding)と会談する予定となっていた。米国に向かう船上で、ヤゴウ(Gottlieb von Jagow)に書簡を認めた。

ドイツを離れる前、エーベルトと長時間の会談をしました。貴方が同席できなくて残念でしたが、徹頭徹尾、彼は政治家です。1918年から1919年、過激な急進主義とボリシェヴィズムという岩礁に乗り上げずに切り抜けることができたのは、エーベルトのおかげと言わざるを得ません。彼もまた、私のユートピア的なジェントルマンの政党の幹部となるでしょう。エーベルトがかつて皮革職人であったこと、なぜ今になって改めて話題にするのでしょうか。ジョゼフ・チェンバレン、彼は偉大なカメレオンです。帝国主義者になった一介のイギリス人です。チェンバレンはバーミンガムで政治家へとの上がる前は、靴職人の息子で父親の徒弟だったのです。保守党党首のボナー・ローは鉄鋼の仲介業者でしたし、ディズレーリはユダヤ人少年にすぎなかったのですから³⁸。

この書簡では、自らが旗揚役となる新党を「ジェントルマンの政党」としている。ただし、このジェントルマンとは出身や社会階級によって規定されるものではなかった。というのも、皮革職人から大統領となったエーベルトこそが、この「ジェントルマンの政党」の指導者の一人になるべきであるとしているからである。この書簡は、英国の保守派の政治家と出自を引き合いに出し、「人間とは何と悲しいものか」という文言で締めくくられている。

1923年3月、ゾルフは再びハイルブロンに宛てて書簡を認めた。この書簡からは、駐日大使という「孤立したポスト」にいることへの焦燥感がうかがえる。

あと何年間まだまだ現役でやっていけますし、日本ではなくて、もっと私であれば貢献できるというポストに就かなければと、ますます強くそう感じているのです。私は友好的な日独関係を構築しましたし、共感を得てきました。摩擦が絶えない中、私自身のみならず、ドイツに対する信頼を勝ち取ることができました。日本のみならず、他国の外交団からもです。我々に対する共感と好感は増してきています。これ以上、私にできることはありませんし、他の人であっても同様です。広く浸透している共感を政治的に利用することなどできません。日本政府は、多大な難題と葛藤していますが、それらの問題

³⁷ Solf an Metternich, Zingst b. Nebra Bez. Halle, 11. November 1919, BArchK, N1053-140.

この書簡は、フィーチの伝記の付録にも収められている(Vietsch (1961), S. 382-386)。

³⁸ Solf an von Jagow, an Bord S.S. Reliance 20. Oktober 1922, BArchK, N1053, Nr.114.

を解決できるような段階にはありません。ワシントン会議は、この国にとっては必要な変更を加えただけの小ヴェルサイユみたいなのです³⁹。

この書簡では、日本にとってのワシントン会議を「小ヴェルサイユ」と表現している。ゾルフは、この「小ヴェルサイユ」にドイツは介入するべきではなく、大使として担うべき役割も少ないと考えていた。自らの政治的手腕と経験、人脈を生かすことのできるポストに就くことを望み、駐米大使ないし駐英大使としてのポストを得るべく、ベルリンに働きかけていた。そもそも、ヤゴーに宛てた私信では「政治はロンドンやパリ、ワシントンを中心に動いている」と綴っていたのである⁴⁰。

1925年2月28日、東京にいたゾルフはエーベルト死去という報に接する。翌3月1日付の知人女性に宛てた私信の中で、次のように綴っている。

昨晚、エーベルトが亡くなりました。困難を極めた時期、一番近くで彼を見てきましたから、それなりに彼のことをよく理解していましたし、評価していたのです。誰が後を継ぐのでしょうか。この破局についてドイツ人ではない人々が物申す姿を目にし、否応なく耳に入ってきてしまうのが何とも悲しいのです。ドイツに思いを馳せており、この孤立したポストでできること以上に、もっと力になりたいのです。政党を左派から右派まで集めて一緒にすると的を絞ることができず、うまくいきません！命中したとしても、たまさか命中しただけです。未だに、人類史上かつてない戦争に負けたことをわかっていないドイツ人がいるのですから。また一方では、そのことを忘れてしまったような人もいるのですから。残りの三分の一のドイツ人は小心者なのです⁴¹。

ゾルフにとって、既存の政党は一長一短であり、フィーチの言葉を借りれば「政党ホームレス」であった⁴²。革命直後、進歩人民党と国民自由党の党员によって結党した民主党がゾルフの政治的立場にもっとも近かった。しかし、民主党の党内分裂を目の当たりにし、自ら新党を立ち上げる構想を持つようになる。ゾルフの新党構想の中で、エーベルトは支柱というべき存在だったのである。

5 おわりに

ゾルフは外務長官を辞任後も植民長官の地位には留まったが、翌1919年2月、ベル(Johannes Bell)が植民長官に任命されたことに伴い、植民長官を辞任した。海外領土の放棄が課せられたヴェルサイユ条約が締結されるまで、ゾルフはウィルソン主義の下での植民地構想を主張していた。帝国期の海外領土、その中でも中央アフリカの回収に固執していたのである。しかし、ヴェルサイユ条約の批准が決まると、植民地の回復を唱えることもなくなった。右派による植民地回復キャンペーンにも苦言を呈するようになる。植民地の回復ではなく、国連の委任統治という協働作業に加わり、英国やフランスなど他の植民地帝国との関係回復につなげるべきとし、主張を変えていく。

1933年以降、ナチ・プロパガンダの中で、植民地事業の牽引役として自らの名前が挙がることにも不快感を持つようになる。1935年3月、ヴィルヘルムスハーフェンに海軍博物館を建設する話が持ち上がった。同館は帝国期の植民地に関する展示を企画しており、植民地総督と植民地長官を歴任したゾルフに対して、直筆のメッセージの提供を求めた。しかし、ゾルフはメッセージを寄せることを拒んだのである⁴³。

1918年12月、ゾルフは革命の急進化を求めた独立社会民主党と対立し、反革命派のレッテルを貼られ、外務長官を辞任することとなった。革命から2年後、ゾルフは駐日大使に任命される。市民階級に属しながら駐日大使となった最初の事例となった。ゾルフ以前の歴代駐日公使ないし大使は、爵位や貴族の称号を持っていたのである⁴⁴。共和国政府の左派からは反革命派とされたゾルフであったが、保守的な傾向の強い日本在留ドイツ人からは、共和国から派遣されたリベラルな大使と目され、反感を買った。東京のドイツ東洋文化研究協会(OAG)では、会員が帝政期の赤、白、黒の三色

³⁹ Solf an Heilbron Tokio 16. März 1923, BArchK, N1053-111.

⁴⁰ Vietsch (1961), S. 247.

⁴¹ Vietsch (1961), S. 261.

⁴² Vietsch (1961), S. 225.

⁴³ Solf an Ronneberger, 13. März 1935, BArchK, N1053-43.

⁴⁴ Hans Schwalbe / Heinrich Seemann (Hrsg.) (1974), *Deutsche Botschafter in Japan 1860-1973*, Tokyo: Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens.

旗に固執し、共和国の赤、金、黒の三色旗を掲げることを拒否したことで、ゾルフが介入する事態となった。また大使館の人事をめぐり、ゾルフに対するリコール運動も起きた。このような騒動を受け、ゾルフ自身も「社交クラブのバーに入り浸る日本在留ドイツ人」に辟易するようになる⁴⁵。

駐日ドイツ大使の職を最後として外務省を辞職したが、その後もリットン調査団のドイツ代表委員、ヒンデンブルクの後継となる大統領の候補としてゾルフの名前が挙げられた。しかしリットン調査団については、元駐日大使という経歴と日本の政財界との人脈から親日的な傾向があると見られて候補から外された。1932年のドイツ大統領選では、時の首相ブリューニング（Heinrich Brüning）と共和国派がヒトラー（Adolf Hitler）の当選を阻止するため、老齢のヒンデンブルクを担ぎ出した。もともとヒンデンブルクの支持層を射程に据え、出馬する予定であったゾルフの出番はなくなった。

大統領選への出馬を見送った後、反ヒトラーの結集軸となる中道政党の結党に向けて動いた。しかし、エーベルトが左右両翼から攻撃を受け、揺さぶられ続けたのと同様、ゾルフも自らの政治的立ち位置を定めることができなかった。ブルジョワ陣営の政治家や退役軍人の中に根強い反ユダヤ主義とナショナリズムへの傾倒に対して批判的であったことから、手を組める保守派も限られた。さりとて、急進的な革命派であった社会民主党の左派とは折り合いが悪く、中央党とその支持基盤は植民地総督時代からの論敵であった。革命後の人民委員政府が左右両翼を包含しようとしたことが混乱の原因と考えていたことから、ゾルフは少数精鋭の政党を結成しようとした。保守、右派陣営とも袂を分かち、中央党、社会民主党の左派と共産党の支持基盤を排除し、彼らとの共闘を避けたことで、ゾルフの新党結成は時機を逸し、反ヒトラーの結集軸は瓦解してしまう。

1918年11月25日、アンシャン・レジームと酷評された演説の中で、ゾルフは「ドイツの終わり」（Finis Germaniae）と言いつつ、15年後の1933年1月30日、同じ言葉を口にする事となる。その日、ヒトラーの権力掌握を祝う党員の松明行列がゾルフの自宅があるアルゼン通りを横切ったのである。窓際に座っていたゾルフは、通りを見下ろしながら「ドイツの終わり」と呟いた⁴⁶。

⁴⁵ スヴェン・サーラ／クリスチャン・W・シュパング（ヤコビ・茉莉子訳）（2011年）「第一次世界大戦後の日独関係におけるドイツ東洋文化研究協会（OAG）の役割」杉田米行編『1920年代の日本と国際関係』春風社、99-100頁；Vietsch（1961）、S. 243-252.

⁴⁶ Vietsch（1961）、S. 325.

■ 文書館史料

Bundesarchiv, Koblenz (BArchK), N1053 (Nachlass Solf).

■ 文献

(欧文)

Hempenstall, Peter J / Mochida, Paula T. (2005), *The Lost Man - Wilhelm Solf in German History*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin, Japanisch-Deutsche Gesellschaft (ベルリン日独センター, 日独協会) (2005) *Brückenbauer: Pioniere des Japanisch-Deutschen Kulturaustausches* (日独交流の架け橋を築いた人々), München: Iudicium.

Kaiser Wilhelm II (1922), *Ereignisse und Gestalten aus den Jahren 1878 - 1918*, Leipzig: K. F. Koehler.

Max von Baden (2011), *Erinnerungen und Dokumente: Reihe Deutsches Reich VIII/I-II*, Hamburg: Severus Verlag.

Hans Schwalbe / Heinrich Seemann (Hrsg.) (1974), *Deutsche Botschafter in Japan 1860-1973*, Tokyo: Deutschen Gesellschaft für Natur - und Völkerkunde Ostasiens.

von Vietsch, Eberhard (1961), *Wilhelm Solf. Botschafter zwischen den Zeiten*, Tübingen: Wunderlich.

von Vietsch, Eberhard (Hrsg.) (1964), *Gegen die Unvernunft: Der Briefwechsel zwischen Paul Graf Wolff Metternich und Wilhelm Solf, 1915-1918*, Bremen: Carl Schünemann Verlag.

Schiffer, Eugen (1951), *Ein Leben für den Liberalismus*, Herbig: Berlin

Tunnat, Frederik D (2014) *Die Deutsche Gesellschaft 1914 und ihr Gründer*, Berlin: Edition Vendramin.

(邦文)

スヴェン・サーラ／クリスチャン・W・シュパンゲ (ヤコビ・茉莉子訳) (2011年) 「第一次世界大戦後の日独関係におけるドイツ東洋文化研究協会 (OAG) の役割」 杉田米行編『1920年代の日本と国際関係』春風社。

ゾルフ、ヴェー・ハー、長田三郎訳 (1926年) 『将来の植民政策』有斐閣。

竹中亨 (2018年) 『ヴィルヘルム 2 世』中公新書。

中村綾乃 (2017年) 「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層－混合婚をめぐる議論を起点として」 工藤章・田嶋信雄編『ドイツと東アジア 1890-1945年』東京大学出版会。

中村綾乃 (2019年) 「ゾルフと第一次世界大戦－城内平和と懐疑、植民地の回復－」 言語文化共同研究プロジェクト 2018『言語文化の比較と交流 6』大阪大学大学院言語文化研究科。

成瀬治・山田欣吾・木村靖二 (編) (1997年) 『ドイツ史 3』山川出版社。

日独交流史編集委員会 (2013年) 『日独交流 150年の軌跡』雄松堂書。

ゲルヴァルト, R. (大久保里香・小原淳・紀愛子・前川陽祐訳) (2020年) 『史上最大の革命』みすず書房。

明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記

渡辺貴規子

1 はじめに

ジャンヌ・ダルクは、現代の日本で最も有名なヨーロッパの偉人の一人である。国立国会図書館国際子ども図書館のOPACによると、第二次世界大戦以降、現在までに、マンガも含めると、52種のジャンヌ・ダルクの児童向けの伝記が出版され、そのうち、21世紀に出版されたのは12種にのぼる¹。ジャンヌ・ダルクの児童向けの伝記は、現在の日本で定番化している。また実際に、若者の間での認知度も高い。たとえば、2011年にクリスティーン・ロバン＝サトウが18歳から21歳の日本の大学生213名を対象に行ったアンケートによると、92%の学生がジャンヌ・ダルクを知っており、72%が百年戦争の英雄であることを理解していた。彼らはジャンヌ・ダルクの生涯を歴史教科書のほかに、テレビ、映画、そしてマンガや本からも学んでいた²。

ジャンヌ・ダルクが児童向け伝記の被伝者として定番化したもとをたどると、明治時代に遡る。1869(明治2)年、『西洋英傑伝』所収「二編上 仏郎国女傑如安之伝」として初めてその伝記は日本で出版され、近代児童文学が日本で誕生する1890年代以降も³、児童の模範として、頻繁に児童向けの読み物の中でその伝記が公刊された。

本稿では、ジャンヌ・ダルクの伝記が児童向けの読み物として定番化する基礎を作った読みものとして1890年代に発行された五つの児童雑誌・少年雑誌に掲載されたジャンヌ・ダルク伝について検討する。すなわち、『穎才新誌』掲載の「女傑ジヨアンダーク伝」(1890年)、『少年文武』掲載の「女傑若安達亜克の偉勲」(1891年)、『少年園』掲載の「ジヨアンダークノ伝」(1892年)、『少国民』掲載の「如安達克」(1897年)、そして『少年世界』掲載の「ジャンヌ、ダルク」(1898年)の五つである。

掲載された五誌は、明治時代中期を代表する児童雑誌・少年雑誌であった。たとえば『穎才新誌』は明治時代初期から相次いで出版された青少年向けの投稿雑誌の代表格である。『少年園』は日本初の児童向けの総合雑誌として画期的なものであり、それを模した『少年文武』『少国民⁴』とともに多くの読者を獲得した。『少年園』編集主任の高橋太華、『少国民』編集長の石井研堂、『少年文武』編集長の中川霞城の三者を、少年雑誌の記者の「当代三指に屈すべき人」とする見方があるほどである⁵。最後の『少年世界』は博文館が1895年に主筆に巖谷小波を迎え創刊した児童雑誌で、文学的読物の充実と安価な販売価格により他の競合誌を圧倒した⁶。このような明治時代中期の主要な児童向けの雑誌にジャンヌ・ダルク伝は掲載され、多くの児童読者に読まれたのである。

※明治時代の資料からの引用の際には、適宜旧字を新字に改め、ルビを省略・付加した。また、合略仮名については分解して表記した。

¹ 国立国会図書館国際子ども図書館OPACにて「ジャンヌロダルク」で検索。
<https://www.kodomo.go.jp/> (2021年4月18日最終アクセス)

² Christine Robein-Sato, "JANNU DARUKU", Jeanne d'Arc sous le regard des Japonais', *De Domremy à Tokyo: Jeanne d'Arc et la Lorraine*, Nancy: Édition Universitaire de Lorraine, 2013, p.377-391.

³ 日本における近代児童文学の始点については1891年1月の博文館の『少年文学』の刊行開始とする見方がある他、諸説ある。(Cf.鳥越信『日本児童文学史』、ミネルヴァ書房、2001年)

⁴ 『少国民』は1889年7月に学齢館から『小国民』の雑誌名で創刊されたが、1895年に遼東半島の還付を批判する記事が治安妨害罪に問われ、同年11月に『少国民』に雑誌名が変更された。(続橋達雄『児童文学の誕生—明治の幼少年雑誌を中心に』、1972年、196-200頁。日本児童文学学会編『児童文学事典』、東京書籍、1988年、376頁。)

⁵ 木村小舟『増補改訂 少年文学史 明治編』、童話春秋社、1941年。

⁶ 博文館はそれまでに発行した二十数誌を『太陽』、『文芸倶楽部』、『少年世界』に統合する形でこの雑誌を創刊し経営の合理化を図った。このことは、児童雑誌・児童図書出版が大量生産の営利の対象となるほどに、その市場が拡大していたことを意味する。営利も大きな目的とする『少年世界』の創刊を続橋達雄は児童文学の「創始期」と「展開期」の重要な接点と位置づける。(菅忠道『日本の児童文学』、大槻書店、1966年、42頁。続橋達雄、前掲書、192頁。)

明治時代におけるジャンヌ・ダルクの文献に関する先行研究には、高山一彦の研究と渡邊洋子の研究がある⁷。両者ともに、『西洋英傑伝』以降に出版された単行本、新聞連載、雑誌掲載等におけるジャンヌ・ダルクの描かれ方の変遷、およびその社会的背景をたどっている。しかし両者の研究には児童雑誌におけるジャンヌ伝は研究対象として含まれず、言及されなかった。また、明治時代に流通したジャンヌ・ダルク伝の多くは、ヨーロッパの作品の翻訳・翻案である場合や、日本でそれ以前に発表された作品の再話である場合があった⁸。しかしながら、先行研究ではこの点にはほとんど留意されなかった。したがって本稿では、ジャンヌ・ダルクの伝記をそれぞれの作品の原典または原テキストにも留意しつつ検討することで、先行研究を補完し、明治時代のジャンヌ・ダルクの表象をより詳細に把握することにも貢献しうらと思われる。

第2節以降の本稿の構成は次の通りである。第2節では、児童雑誌に掲載される以前のジャンヌ・ダルクに関する伝記的な作品について、青少年の読者とその教育が意識されたと考えられるものを中心に整理する。明治時代中期以降の児童読者がジャンヌ・ダルクの伝記を享受するようになった素地はこの段階にできた。第3節から第6節では、上に挙げた五誌に掲載されたジャンヌ・ダルク伝について、それぞれの作品の原典または原テキストにも留意しつつ検討する。最後に第7節でまとめを付す。

2 児童雑誌・少年雑誌掲載以前のジャンヌ・ダルクの表象

筆者の調査では、1868（明治元）年から1912（明治45・大正元）年に日本で出版されたジャンヌ・ダルクの記事、単行本は現時点で判明しているだけで65種確認される⁹。このうち2019年3月までに判明した58種については表を別稿に掲載したので、参照されたい¹⁰。

本節で問題とする1890年代以前のジャンヌ・ダルク伝において、児童読者向けの伝記との関わりの中でとくに重要な特徴は以下の三点に集約される。第一に、第1節でも言及した、日本初のジャンヌ・ダルク伝である『西洋英傑伝』所収「二編上 仏郎国女傑如安之伝」が、一般読者ととも児童もその読者対象に含んだ点である。第二に、1870年代前半から発行された世界史の教科書の中でジャンヌ・ダルクの逸話が相次いで紹介された点である。第三に、1880年代半ば以降に、若年層の女性向けの教訓書や啓蒙的な婦人雑誌の中でジャンヌ・ダルクが紹介された点である。

まず、『西洋英傑伝』は、明治時代初期の世界史教育と国語教育に貢献した翻訳啓蒙書の一冊である。世界史教育では、1872年の「学制」頒布直後の官版万国史教科書が未編纂の時期に、教科書として使用された書物の一冊であった¹¹。国語教育では「文部省布達・第五八号」（1873年4月29日）において、小学校の教育現場で読まれる「読方之部」の「課業書」の一冊として指定された¹²。冒頭部に付された著者の作楽戸痴鶯による「例言」には、「経済の責ある諸君子はいふもさらなり市街の君も児童の伽物語に読み聞せぬはば

⁷ 高山一彦「明治日本におけるジャンヌ文献」『図録 ジャンヌ・ダルク展』、1982年、176-178頁。高山一彦『ジャンヌ・ダルク』、岩波新書、2005年。渡邊洋子「明治におけるジャンヌ・ダルク」、『独文学報』第14号、1998年、1-20頁。

⁸ 佐藤宗子によると、再話とは、何らかの原テキストを意識して新たなテキストを文字化する作業、およびその結果生み出されたテキストと定義される。外国文学作品については、原作を一般に紹介する翻訳・翻案を「第一次再話」、「第二次再話」を原テキストとして、その内容を切り取って生成されたものを「第二次再話」と呼ぶ。（佐藤宗子、『「家なき子」の旅』、平凡社、1987年、145頁、346頁。）

⁹ 注10の表の58種に加えて、以下の7種の文献が2021年4月までに確認された。作楽戸痴鶯他編『万国史略 中編下』、文部省、1874年；西村兼文『外国史略 卷三』、寿楽堂、1874年；可笑生「女傑若安達亜克の偉勲」、『少年文武』、2巻3号、1891年；内田不知庵「如安外伝」、『読売新聞』、1893年；岡本胡蝶「仏国の女将軍」『少女界』5巻2号、1906年；沼田笠峰「ジャンヌダルク」、『少女世界』第2巻7-8号、1907年；澤田撫松「將に亡びんとする仏蘭西を再建せしオルレアンの少女」、『婦人くらぶ』（紫明社）、4巻10号、1911年。

¹⁰ 拙稿「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象—『西洋英傑伝』を中心に」、『千葉大学教育学部研究紀要』、第67巻、2019年、412頁。

¹¹ 木全清博「万国史教科書の内容分析(1)」、『滋賀大学教育研究所紀要』第22号、1988年、35-42頁。

¹² 府川源一郎『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究』、ひつじ書房、2014年、19-20頁。

育英の階梯にも成るべく¹³」とあり、児童読者に「読聞せ」ることも意識された。また、筆者は『西洋英傑伝』について別稿で論じたことがあり、その原典がマーガレット・フライザー・タイトラー (Margaret Fraser Tytler, 生没年不詳) の児童向けの伝記集 *Tales of the Great and Brave*(1838)および、*Tales of the Great and Brave, Second Series* (1843) であることを明らかにした¹⁴。このように、原典が児童向けの読み物であった点、作者(翻訳者)の作楽戸痴鶯が児童読者を意識した点、実際に学校教育の現場において読まれた点から、この書物が児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記の原点でもあったことが判明する。つまりジャンヌ・ダルクは日本で紹介された当初から、児童向け伝記の被伝者としての側面を持っていた。また実際に、この書物の読者は比較的多かったと思われ、たびたび再話の原テクストとして使用された¹⁵。

次に、『世界蒙求 前編』(1873年)、『各国英智史略』(1873年)、『世界智計談 中』(1874年)、文部省出版『万国史略 卷之二』(1874年)、西村茂樹編『校正万国史略 卷之六』(1875年)、『東西蒙求 卷之二』(1884年)といった世界史の教科書、文部省出版『仏国史略 卷之三』(1875年)、高橋二郎訳『法蘭西志』(1878年)、坪谷善四郎『仏蘭西史』(1890年)などのフランス史の教科書の中でジャンヌ・ダルクの挿話が見られる。特筆すべきは、これらの教科書の中に文部省出版の『万国史略』と『仏国史略』が含まれた点である。とくに『万国史略』は、文部省が師範学校と協力して初めて発行した小学校用歴史教科書の一冊であり、文部省が近代小学校の歴史教材の模範として提示したものであった¹⁶。明治初期の歴史の教科書にジャンヌ・ダルクが登場したのは、それらの編纂時に参照された欧米の歴史書に、その記述が存在したからだと思われる。明治時代初期から、ジャンヌ・ダルクが教科書に登場する模範的な歴史上の人物として、教科書編纂者、教育者、学習者の児童たちに認識されたのは、児童向け読み物の中でジャンヌ・ダルクの伝記が繰り返し掲載された理由の一つであると考えられる。

最後に、1880年代から女性向けの読み物の中でジャンヌ・ダルクが模範的な女性として紹介された。例えば巖本善治が山下石翁の筆名で発表した「女傑アークの伝」(『女学新誌』掲載、1884年)、『日本之女学』掲載「ヂヤンデアークの伝」(1889年)は啓蒙的な婦人雑誌での紹介の例である。また、西村茂樹編、宮内省出版の『婦女鑑』(1887年)をはじめ、『悲憤壯烈 才女列伝』(1891年)、『泰西婦女亀鑑』(1892年)といった女性向けの教訓書の中でも紹介された。先行研究でも「明治10年代から20年代にかけてのジャンヌ・ダルク像は女性の啓蒙を目的とし、『救国の英雄』という形で女性に社会参加のモデルを提供した」と指摘された¹⁷。実際に、たとえば、山下石翁(巖本善治)が執筆した「女傑アークの伝」は、『西洋英傑伝』のテクストに引用に近い形で大いに抛りながらも、ジャンヌが自らの運命を嘆く場面が削除され、また彼女が「国家」に尽くす様子を表す言葉が加えられて、女性読者の社会意識を鼓舞する再話者・巖本善治の強い意志が窺われる文章となっている¹⁸。

このように、児童雑誌、少年雑誌に掲載される以前に、ジャンヌ・ダルクが教科書や教訓書の中で相次いで紹介されたことで、彼女が児童の模範となる歴史上の人物として認識される素地が明治20年代までに出来上がっていたと考えられる。それでは、児童雑誌、少年雑誌の中でジャンヌ・ダルクはどのように描かれたのであろうか。

¹³ 作楽戸痴鶯、『西洋英傑伝』、英蘭堂、1872年補刻(京都大学人文学研究所所蔵)、初編上、2丁ウ。

¹⁴ 拙稿、前掲論文、420-418頁。

¹⁵ 同上、417-415頁。

¹⁶ 海後宗臣『歴史教育の歴史』、東京大学出版会、1969年、24-25頁。文部省が初めて出版した小学校用の歴史教科書は『史略』(1872年)、『日本略史』(1875年)、『万国史略』(1874年)の三部作であった。

¹⁷ 渡邊洋子、前掲論文、9頁。

¹⁸ 拙稿、前掲論文、416頁。

3 『穎才新誌』におけるジャンヌ・ダルクの伝記（1890年）

『穎才新誌』（1877年3月創刊）は、少年雑誌の嚆矢とされる『少年園』の創刊以前から続く、青少年向けの作文投稿雑誌の代表である。毎週土曜日発行の週刊誌で、毎週約一万部の発行部数があり、投稿作文の数も1882(明治15)年には一日約50通、一か月に1500通があったという¹⁹。向川幹雄によると、初期の頃の作文の投稿者は十代前半で小学高等科の生徒が中心であり、その後、購読者層は中学生、青年へと年齢が上がったと推定される²⁰。この雑誌の明治20年代の読者の年齢層はいわゆる「子ども」よりも年上であったが、青少年向けの雑誌にジャンヌ・ダルクの伝記が掲載されたのはこれが最初であった。

『穎才新誌』に掲載されたジャンヌの伝記も読者からの投稿作文で、江連松花というペンネームの生徒が投稿した「女傑ジョアンダーク伝」である²¹。しかしながら、これは投稿者が独自に作成した作文ではない。この作文は、掲載号発行の数か月前に出版された教科書、坪谷善四郎著『仏蘭西史』（1890年）の一節「女傑ジョアンダークノ偉勲」を、部分的な省略や表現の微細な変更を加えながらも、ほぼそのまま書き写した文章なのである。このことは、冒頭部を坪谷の『仏蘭西史』の該当部分と比較すれば一目瞭然である。

ジョアンダーク女ハ、ミユズ河畔ノドンレミイト称スル、一村落^{マツ}旅居ノ少婢ニシテ、常ニ馱馬ヲ使役スルヲ以テ業トス、或ハ云フ、農業牧畜ヲ以テ父母ヲ養ヘリト、ジョアン幼ヨリ忠君愛国ノ教ヲ受ケ、長スルニ及ンデ、勤王ノ念益々深シ（江連松花「女傑ジョアンダーク伝」『穎才新誌』683号、1890年8月、2頁）

ジョアンダーク女ハ、ミユズ河畔ノドンレミイト称スル一村落^{マツ}旅店ノ少婢ニシテ、常ニ馱馬ヲ使役スルヲ以テ業トナセルモノナリ。或ハ云フ、農業牧畜ヲ以テ父母ヲ養ヘリト、ジョアン幼ニシテ忠君愛国ノ教ヲ受ケ、長スルニ及テ勤王ノ念益々深カシ（坪谷善四郎『仏蘭西史』、博文館、1890年3月、191頁。）

教科書からの抜粋に近い文章が雑誌に掲載されるのは、明治期のジャンヌ・ダルクについての文章に関しては、珍しいことではない。実際に、筆者が調査する中でも同様の事例が見られ、それについて論じたことがある²²。明治時代に流通したジャンヌ・ダルクに関する文章の場合、『穎才新誌』の例のようなほとんど同じ文章の掲載ではなくても、再話が多いため、冒頭部や固有名詞の表記を見ることで原テキストを推定できるものもある²³。

『穎才新誌』掲載の作文も、刊行されたばかりの『仏蘭西史』を模して投稿された。ところで、原テキストの『仏蘭西史』は、著者の坪谷善四郎によると「本書ノ事実ハテーロル氏ノ仏蘭西史、グードリツチ氏ノ仏蘭西史ニ依リ、傍ハラ諸書ヲ参考シ²⁴」て書かれた。この言葉にある「テーロル氏」と「グードリツチ氏」とは、明治期の日本の世界史教育のためにその著作の翻訳が使用された、アイルランドの歴史家ウィリアム・クック・テイラー（William Cooke Taylor, 1800-1849）とアメリカの作家サミュエル・グッドリッチ（Samuel Goodrich, 1793-1860）であると考えられる。両者はフランス史に関する著作も残しており、テイラーは『フランスとノルマンディーの歴史』（原題：*History of France and Normandy*, 1830）を、グッドリッチは『学校用絵入りフランス史』（原題：*Pictorial History of France for school*, 1847）を上梓したが、これらは増補版、改訂版も出版されるロングセラーであった。この二冊の中には、ジャンヌ・ダルクの挿話が数ページにわたり掲載されており²⁵、坪谷がジャンヌに関する

¹⁹ 竹内洋『立身出世主義[増補版]—近代日本のロマンと欲望』、世界思想社、2005年、16頁。

²⁰ 向川幹雄『日本近代児童文学史研究Ⅰ—明治の児童文学(上)』、兵庫教育大学向川研究室、1999年、51-54頁。

²¹ 江連松花「女傑ジョアンダーク伝」、『穎才新誌』、第683号、1890年8月、2-3頁。

²² 拙稿、前掲論文、417-415頁。

²³ たとえば本稿第3節の『少年文武』掲載のジャンヌ伝の例を参照。

²⁴ 坪谷善四郎「例言」、『仏蘭西史』、博文館、1890年3月、2頁。

²⁵ Samuel G. Goodrich, *Pictorial History of France for school*, Philadelphia, Sorin and Ball, 1847, p.144-148; W. C. Taylor, *History of France and Normandy*, Philadelphia, C. Desilver, 1859,

る記述を行う際に参考にしたと推定される。

坪谷善四郎（1862-1949）は、東京専門学校（現・早稲田大学）在学中の1888年に博文館に入社した。明治期の児童図書出版を牽引したこの出版社の初期の編集主幹・編集局長であり、『幼年雑誌』（1891年創刊）、『少年世界』（1895年創刊）、『中学世界』（1900年創刊）といった青少年向けの雑誌も複数創刊し、児童図書出版に貢献した。²⁶

坪谷が『仏蘭西史』で執筆した「女傑ジヨアンダークノ偉勲」は分量としては4頁半、2000文字に満たない。ジャンヌ・ダルクの出自、当時のフランスの状況、ヴォークルールの守備隊長を介した王太子シャルルとの謁見、オルレアン解放戦と勝利、ランスでのシャルル七世の戴冠式、戴冠式挙行後に帰郷を望んだジャンヌをシャルル七世が引き留めたこと、1430年春の敗戦と捕縛、シャルル七世の裏切り、1431年5月30日の火刑による死、という一連の出来事が簡潔な文体で記されている。

歴史的な事件が淡々と書かれる一方、坪谷の描くジャンヌ像には大きな特徴がある。それは彼女が幼い頃から「忠君愛國ノ教ヲ受ケ」、成長して「勤王ノ念益々深」くなったと書かれ、幼少期の描写に「忠君愛國」「勤王」という言葉が明記された点である。

たとえば、『西洋英傑伝』ではジャンヌの受けた教育と彼女の性質として、「神を崇み経文を誦するをのみハ教を受け成長に従ひ性質善良柔和にして慈悲の心最と深かりけり²⁷」と述べられた。つまりジャンヌが貧しさゆえに学校教育を受けることができなかったが、信仰心、善良さ、慈悲深さにおいて秀でた子どもとして成長したことが書かれた。

それに対して坪谷の描くジャンヌ・ダルクは、強い愛國心を持ち、「忠君愛國」精神の申し子であるかのように描かれる。ここでジャンヌは、イギリスが「仏国ヲ凌辱」したことに「悲憤慷慨」し、古の賢者が予言した「国家ノ大災ヲ掃除ス」るために出現する「神嬢」とは「我ニアラザルカ」と自ら考えて、「奮然救國ノ大義ヲ唱へ」てシャルルに謁見し戦場へ向かうとされた²⁸。つまり、神の声や周囲の人間の苦しみが戦場へと向かう契機となったのではなく、自分の中の「忠君愛國」の精神に突き動かされ、王太子への謁見を願い出たと書かれたのである。このような書かれ方がなされた理由としては、坪谷が、学校教育で取られた歴史教育の方針を意識した可能性が考えられる。

日本の学校教育制度では、1872（明治5）年の学制において上等小学の科目として歴史教育が規定された²⁹。明治10年代前半までの小学校での歴史教育には、日本史と外国史の両方が含まれ、第2節で言及した、文部省刊行の『万国史略』をはじめ、欧米の歴史書が参照されつつ、複数の外国史の教科書が編纂された。変化の契機は、1879（明治12）年の教学聖旨、1881（明治14）年の小学校教則綱領策定の際に内々に伝えられた聖旨であった³⁰。前者は、明治維新以来の教育が、欧米の学芸を摂取することに傾く傾向があるので、改めて仁義忠孝を基にした教育が学校において行われるようにという内容であった³¹。後者に関しては明治天皇自らが歴史の綱領における次の三点の修正を求められた。第一に、乱、役などの戦争を主筋として歴史を教えることへの批判、第二に戦争ではなく王政が栄えた時期も取り上げるべきだと指摘された点、第三に建国の体制、つまり、神代に関する教材を教科書の最初に入れるよう指示された点であった³²。この聖旨に、歴史教育は尊王愛國の士気を養成するという目標に沿うべきだという考えがあったのは明らかであり、小学校教則綱領以降の小学校の歴史教育では日本史のみが教授されることとなった³³。

『仏蘭西史』は外国史の教科書であり、ジャンヌ・ダルクもフランスの歴史上の人物であ

p.181-186。（後者は増補版。）

²⁶ 日本児童文学学会編、前掲書、487頁。

²⁷ 作楽戸痴鶯、前掲『西洋英傑伝』、二編上、2丁オ。

²⁸ 坪谷善四郎、前掲『仏蘭西史』、191頁。

²⁹ 「歴史教科書総解説」、海後宗臣編『日本教科書大系 近代編第20巻歴史(三)』、講談社、1962年、527-528頁。

³⁰ 同上、551-554頁。

³¹ 同上、551頁。

³² 同上、554頁。

³³ 同上、555頁

るが、学校での歴史教育に沿うものとしてそのエピソードが捉えられた可能性がある。「忠君愛国」「勤王」の精神の申し子のようなジャンヌ・ダルクの描写には、読者である青少年の士気を鼓舞する意図があったと言え、実際に読者がこのように描かれたジャンヌ・ダルクに共感したということもありえたであろう。『仏蘭西史』の文章をほとんどそのまま『顕才新誌』に投稿した江連松花という生徒もまた、そうした青少年読者の一人であったと考えることもできる。ジャンヌ・ダルクと「忠君愛国」という主題は、児童雑誌、少年雑誌に掲載され始めた当初から深く結びついていたことが分かる。

4 『少年文武』におけるジャンヌ・ダルクの伝記（1891年）

『少年文武』は『少年園』において科学記事を担当した中川霞城が主催した月刊誌で、『少年園』創刊から約一年後の1890年1月に張弛館より創刊された。「文武」の言葉が示す通り、文武両道の教育路線が強調され、創刊号では「文学、武芸、理科、美術の四柱を以て一堂を建築し、其中に忠孝節義の神霊あり、是れ実に少年文武の本体なり」と宣言した³⁴。ジャンヌ・ダルク伝が掲載されたのは第2巻第3号の「少年筆華」という読者投稿欄で、可笑生という投稿者による「女傑若安達亜克の偉勳」である³⁵。

結論から述べると、江連松花「女傑ジョアンダーク伝」と同様に、この投稿作文も独自の文章ではない。『婦女鑑』所収の「若安達亜克」の文章と坪谷善四郎『仏蘭西史』の「女傑ジョアンダークノ偉勳」の文章に拠り、両者を組み合わせ、かなり短くしたものである。この点は投稿文の題名「女傑若安達亜克の偉勳」が、二つの原テキストの題名を組み合わせていることから察しがつく。しかし、冒頭部を比較するとより明確になる。

若安達亜克は、一千四百十年に法国の屯列米といへる僻地の村落に生る。父母はいと貧しき農家ならば。其女を教育するの資力あらねど。正直にして神を信ずること篤かりければ。[.....]生長するに従ひて。敬神慈愛の心深く。（「若安達亜克」『婦女鑑 四』、宮内省、1887年、43丁ウ。句点原文ママ）

ジョアンダークは、紀元一千四百十年仏国ミユズ河畔の一小村、ドンレミイに生る。ジョアン幼くして忠君愛国の教を受け、其の長ずるに及んで、勤王の念、益々深く、敬神慈愛の心、愈々厚し。（可笑生「女傑若安達亜克の偉勳」『少年文武』、第2巻3号、1891年3月、70頁。）

『婦女鑑』では、ジャンヌは貧しく学校へは通えなかったが、信仰心と慈悲深さに秀でた子どもとして書かれており、この点で、『婦女鑑』の「若安達亜克」の冒頭部の記述は、先述した『西洋英傑伝』におけるジャンヌの子ども時代の描写とよく似ている。

『少年文武』の文章では、第3節で引用した『仏蘭西史』にある「忠君愛国ノ教」や「勤王ノ念」という言葉が使われつつ、『婦女鑑』の「敬神慈愛の心」という表現も使われ、ジャンヌ・ダルクは幼少期から強い愛国心ばかりでなく、信仰心、慈悲深さもすべて兼ね備えた女性として表されている。また、年代についても『婦女鑑』に拠っている。

可笑生の文章はわずか800文字あまりの短いものである。百年戦争の背景、ジャンヌが王の元まで行くいきさつ、オルレアンでの勝利、シャルル七世の戴冠式、コンピエーニュの戦いでの敗北、火刑といった歴史上の出来事も大変簡単に書かれた。しかし、戦いの場面では短いながらも躍動感のある文となっており、その部分は『仏蘭西史』の方に多くを拠っている。とくに「ジョアン即ち『ナイト』の鎧を纏ひ、剣を掲げ、白馬に跨り、兵卒を指揮し、猛虎の勢を以て、敵軍に当り、城門を開て突進し、英の食糧を奪ひ、以て城中に送る、是に於て、城兵勇氣頓に増し、益々敵軍を攻す」という一文は、『仏蘭西史』の文章を短縮し、また「『ナイト』の鎧」といった原テキストにない表現も使って、ジャンヌが勇猛果敢に戦う様子を生き生きと描き、山場となる印象的な場面を出現させた。

³⁴ 日本児童文学学会編、前掲書、390-391頁。上田信道「『少年文武』創刊号から見た中川霞城の業績」『翻訳と歴史—文学、社会、書誌』第6号、2001年5月、4頁。

³⁵ 可笑生「女傑若安達亜克の偉勳」『少年文武』、第2巻第3号、1891年3月、70-71頁。

本節冒頭でも述べた通り、『少年文武』は文武両道の教育路線が強調された雑誌であった。ジャンヌ・ダルクに関する可笑生の投稿作文は、「忠君愛国の教」や「敬神慈愛の心」といった模範とすべき美德を説くと同時に、実際の戦いの場面が生き生きと描かれていた点も評価され、掲載されたのかもしれない。

5 『少年園』及び『少国民』におけるジャンヌ・ダルクの伝記（1892年、1897年）

『少年園』は1888年11月に創刊され、月に二回発行された。明治期の本格的な少年雑誌の先駆であるとされる。「少年園」（巻頭論文）、「学園」（自然科学などの知識）、「文園」（文芸作品紹介）、「叢園」（季節の話題）、「芳園」（読者投稿）、そして「譚園」（伝記などの読み物）という紙面構成の³⁶、少年向け総合雑誌である。当時の児童向けの逐次刊行物において投稿雑誌が中心的な位置を占めた中で、論文、学習的な記事、そして少年向けの物語や伝記の掲載に注力した点で画期的であり、「少年雑誌界のエポック・メイキングになった³⁷」と評価される。

1892年7月から8月に「ジョアン、ダークノ伝」が掲載されたのは、少年向けの読み物が好評を博した「譚園」の欄であった³⁸。冒頭では「仏蘭西国のジョアンダークと云へる婦人は歴史上もっとも有名なる一少女なり。今歴史家ヒウム氏の筆になれる此少女の伝を茲に抄録せん」と述べられ³⁹、出典について説明された。原典である「歴史家ヒウム氏」の著作とは、デヴィッド・ヒューム（David Hume, 1711-1776）の『イングランド史』（*The History of England, 1754-1762*）、第20章「ヘンリー6世」（"Henry the Sixth"）の中に収録された「オルレアン乙女」（"The Maid of Orleans"）の挿話である。筆者が参照した原典の版では⁴⁰、約14頁にわたる挿話であり、『少年園』でも第89号（1892年7月）と第91号（同年8月）の二号に連載された。児童雑誌、少年雑誌に掲載された中では、初めての長編のジャンヌ・ダルク伝であると言える。また、管見の限りではヒュームの『イングランド史』を原典とするのは、『少年園』掲載の「ジョアン、ダークノ伝」が最初である。従来のジャンヌ伝の再話ではなく、新たな原典の作品の翻訳がなされた点で、新鮮味のある新しい伝記が発表されたと言える。なお、『少国民』第9巻25号（1897年12月）に掲載された岳仙叟「如安達克」は『少年園』掲載の「ジョアン、ダークノ伝」とほぼ同じ文章であるため⁴¹、ここでは『少年園』の「ジョアン、ダークノ伝」に拠って述べていきたい。

まず、冒頭で「此少女の伝を茲に抄録せん」と述べられたように、翻訳の仕方は抄訳であり、訳出される部分と、訳出されない部分とが比較的はつきりと分かれている。訳出されなかった部分は、細かな挿話や、英仏の情勢などの歴史的背景の詳細が多い。歴史記述に対するヒュームの考えが述べられた部分も訳出されなかったが、それは物語の進行を止めるからであろう。訳出された部分は、内容の面では原文に改変を加えず翻訳される傾向にある。したがって、ヒュームの記述の特徴が引き継がれた作品であると言える。

この翻訳の特徴は三つ挙げられる。第一に、ジャンヌが精神的にも強く、武術にも長けた女性として提示される点である。これまで見てきたように、信心深さ、慈悲深さ、「忠君愛国」の申し子など、ジャンヌ・ダルク的美徳は様々に提示されるが、『少年園』掲載の伝記では、ジャンヌは「言語動作一として間然すべき所」のない「非常の大器量ある」優れた女性であり、戦場に行く前から「肝勇拔群」で「女性の常なる怯弱優柔の質を除却」

³⁶ 日本児童文学学会編、前掲書、381頁。

³⁷ 続橋達雄、前掲書、11頁。

³⁸ 無署名、「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第89号、1892年7月、18-21頁；同左、第91号、1892年8月、14-17頁。

³⁹ 無署名、「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第89号、1892年7月、18頁。

⁴⁰ David Hume, *History of England, Volume II*, based on Edition of 1778, with Author's Last Corrections and Improvements, Indianapolis, Liberty Classics, 1983, p.397-410.

⁴¹ 岳仙叟「如安達克」『少国民』第9巻25号、1897年12月、5-17頁。ただし、冒頭の紹介文や漢字の送り仮名の表記等には微細な相違がある。

し、馬を「乗り回すの達者なる」雄々しい女性として書かれた⁴²。第二に、ジャンヌが神の声を聴き、「天命」を受けて国を救おうとしたのは彼女の「想像」であると述べられた⁴³。訳出はされなかったが、ヒュームはこのジャンヌの「天命」のエピソードを書く前に「『奇蹟』と『驚異』とを区別すること、ただの世俗的かつ人間的なあらゆる叙述の中で前者を拒絶し、後者を疑うことが歴史の本分である。」「⁴⁴と述べた。したがって、オルレアンでの勝利等の出来事も克明に述べられるが、そこに奇蹟的な力は介在しない。ジャンヌ・ダルクが信仰心に篤い女性としてではなく、強く秀でた女性として描かれたのも、この点と関係が深いと思われる。第三に、本稿で取り上げた児童雑誌、少年雑誌に掲載のジャンヌ・ダルク伝と比較して、ランスでのシャルル七世の戴冠式以降、ジャンヌが敗北し、捕縛され、裁判にかけられて死刑へと至るまでの顛末が詳細に、多くの分量を取って描かれた。ジャンヌがイギリス軍との戦いに負け、死に至るまでのエピソードは、短縮され、簡単に書かれることが多い。しかし、『少年園』では第 89 号の記事で戴冠式まで、第 91 号の記事で彼女が死へ向かうエピソードが書かれ、十分な量が割かれていると言える。とくに、ジャンヌが宗教裁判にかけられるまでのいきさつ、裁判における裁判官とのやりとりは他の文献と比較しても詳細に書かれている。

『少年園』で掲載されたジャンヌ・ダルク伝は、ジャンヌ・ダルクの一生の出来事が、その栄光と転落の両方がバランスよく書かれた長編の伝記であり、読者が歴史を学習する際にも役立ったと考えられる。奇蹟を「想像」として排したヒュームの記述は合理的であり、翻訳もその特徴を引き継いでいる。児童向けの伝記としては、『穎才新誌』や『少年文武』に掲載された文章よりも、分量の面でも、歴史的記述の面でも充実している。『少年園』という少年向けの読み物が充実した画期的な雑誌で発表され、多くの少年読者の目に触れた、初めての本格的な児童向けの伝記とすることができるだろう。

6 『少年世界』におけるジャンヌ・ダルクの伝記（1898 年）

『少年世界』は博文館が「中小学々齡諸君」を読者対象として 1895 年に創刊され、主筆の巖谷小波の「お伽噺」をはじめ、多数の文壇人を擁した執筆陣による文学的読み物が人気を博し、明治期を代表する少年雑誌となった⁴⁵。『少年世界』に掲載された「ジャンヌ、ダルク」は、作者の高山樗牛が独自に執筆した文章である⁴⁶。ただし日本で公刊されたそれまでのジャンヌ伝が、歴史的事実を確認する資料として参照されたことは推測される。

この作品は、『少年世界』第 4 巻第 1 号（1898 年 1 月）から第 4 巻 27 号（1898 年 12 月）までの一年間連載された「東西二十四傑」シリーズの記事であった。「東西二十四傑」は、日本と外国の英雄の伝記の連載であり、各記事は平均的に約 10 頁の分量で書かれ、当時の『少年世界』の目玉の一つであった。たとえば博文館の雑誌『太陽』第 2 巻第 25 号（1896 年 12 月）には、「博文館発行四大雑誌改良広告」の一つとして「明治三十年の『少年世界』」という広告がある。そこではこれからの『少年世界』が「従前の体裁を一変し、泰西雑誌の編集法に則り、益々材料を精選し、有益にして、趣味多き記事のみを執り、江湖少年諸君が日々ご娯楽の間、彌々益々智徳を啓発するの資に供せんとす」と宣言され、具体的に「英雄談 能く東西英雄の面目を描き出し、読む人をして眼前之を会見するの思あらしむ」というように「英雄談」が重要な読み物のジャンルとして挙げられた⁴⁷。ジャンヌ・ダルクは「東西二十四傑」シリーズの最後を飾る 24 人目の英雄であると同時に、紹介された 24 名の人物の中で唯一の女性の被伝者である。

「英雄談」に力を入れるという広告の文言に違わず、「ジャンヌ、ダルク」は児童読者に

⁴² 無署名、「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第 89 号、1892 年 7 月、19 頁。

⁴³ 同上、19 頁。

⁴⁴ (原文: It is the business of history to distinguish between the *miraculous* and the *marvelous*; to reject the first in all narrations merely profane and human; to doubt the second;) David Hume, *op.cit.*, p.398.

⁴⁵ 日本児童文学学会編、前掲書、387-388 頁。

⁴⁶ 高山林次郎「ジャンヌ、ダルク」『少年世界』、第 4 巻 27 号、1898 年、60-66 頁。

⁴⁷ 「博文館発行四大雑誌改良広告」『太陽』第 2 巻第 25 号、1896 年 12 月、(四)頁。

とって分かりやすく、かつ生き生きとした作品となっている。まず、7頁の文章において「一、はしがき」「二、おひたち」「三、オルレアン城の救助」、「四、最後」と起承転結が明確に分けられている。また、「さらばジャンヌ、ダルクは如何なる人ぞ⁴⁸」というような読者への問いかけもなされ、読者が読み進めていきやすいよう工夫が施されている。

ジャンヌ・ダルクの描かれ方に関しては、彼女が特別などころのない普通の子どもであった点、彼女が若い女性であった点が強調され、彼女の功績とのギャップが頻繁に書かれた。たとえば、「ジャンヌ、ダルクは貴族にもあらず、武士にもあらず、又男子にもあらず、教育もなく門閥もなく、彼が其大事に当るまでは、仏蘭西中に其家族隣人の外は何人も其名をだに知らざりし一女子にして、其年さへも僅に十八の妙齡なりき」と紹介され、幼少期には「何事もなく田舎の一少女として暮し」たとされた⁴⁹。「一女子」「一少女」「一小女子」といったジャンヌを示す言葉はこの文章で10回以上使用されている。一方で、ジャンヌが成した功績については「回天の偉業」、「非凡の威力」、「めざましき勝利」、「驚くべき勝利」、「奇蹟」と書かれ、戦場でのジャンヌの様子は次のように描かれた。

彼れ戦に臨むや常に全軍に先ち、矢石乱飛の間を馳騁し、叱咤督励到らざる所なし。彼に従へる前列の兵士、敵丸に中りて数十百人立地に仆るゝが中に、奇しき哉ジャンヌは身丸一矢を受けず、悠然として干戈の間を周旋する様は真に人業ならず見えにけり（高山林次郎「ジャンヌ、ダルク」『少年世界』第4巻第27号、1898年、64頁。）

このようなジャンヌの「矢石乱飛の間を馳騁」するような勇敢さ、「人業ならず」と書かれるような様子と、彼女がただの「一少女」であることとのギャップは、歴史的な出来事の記述の中に織り交ぜられて表現され、読者はジャンヌの周囲で起こる出来事の不思議さに強く惹かれたのではないかと推測される。また、彼女が13歳の頃に天使の声を聴いたという出来事が書かれたのは、児童雑誌の中では『少年世界』掲載の「ジャンヌ、ダルク」が最初である。それまで児童雑誌、少年雑誌の中で愛国心の発露や「想像」として書かれてきたこの出来事が、「奇しくも又驚くべき」奇蹟として書かれたことで⁵⁰、物語の不思議さは増し、ジャンヌの伝記が読み物として面白くなったと言うことはできるだろう。

「ジャンヌ、ダルク」の作者、高山樗牛が、明治30年代前半に『太陽』の主筆として華々しい言論活動を展開した思想家であることは周知のとおりである。彼がこの児童向けの伝記を執筆したのは、1897年5月に博文館に招聘されて『太陽』の主筆となり、「日本主義」を標榜しながら諸論文を次々に発表したのと⁵¹、まさに同時期のことであった。彼は『少年世界』に寄稿した論説「少年の読書の法如何」（1898年）で次のように述べた。

少年の志を風発し、自然に奮励せしむるものは、偉人傑士の伝記に若くは無し。由来少年の特性及び美質は模倣嘆美の精神に富めるにあり。今夫れ伝記は忠孝、節義、勤学、苦行、功名の譚話を史上の事実として吾人に語るもの、其中おのづから吾人をして感奮興起せしむるものある也。[.....]吾少年諸子の中、雑念無志心鏡を曇らし、情欲空想雲の如く湧く時は、去て英傑の史伝を繙け、必ずや翻然として自ら悟り、報然として自ら愧ぢむ。是の如くにして一気勇猛の精神を鼓舞し、鞭撻一番、古人を仰で以て精進せば、何物の行路難か能く吾人の前程を沮遏し得べき。（高山林次郎「少年の読書の法如何」『少年世界』、第4巻1号、1898年、18頁。）

このように、伝記は、被伝者を児童読者が模範とし「忠孝、節義、勤学、苦行、功名」という美德を学ぶためのものであるとして高山樗牛は捉えている。同時に、それが少年読者の「志を風発し、自然に奮励」して、「勇猛の精神を鼓舞」するものであると考えられていた。また、高山樗牛は同時期の『少年世界』に寄稿した別の論説「愛国心」（1898年）において、

⁴⁸ 高山林次郎「ジャンヌ、ダルク」『少年世界』第4巻第27号、1898年、60頁。

⁴⁹ 同上、60頁。

⁵⁰ 同上、60-61頁。

⁵¹ 「高山樗牛」、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第6巻、1957年、280-282頁。

少年読者が「真誠に国家を愛護するの精神」を持ち国を発展させるべきこと、国家の有事に際しては「国家の為に、身を犠牲に供し、皇室の為め、又後世子孫の為に一命を擲つは帝国臣民が絶大の名誉とすべき所なり」と強い筆調で読者に説いている⁵²。

高山樗牛が「東西二十四傑」シリーズに寄稿したのは「ジャンヌ、ダルク」一編のみである。さらにこの伝記は、シリーズの最後を締めくくる重要な位置にあった。なぜ被伝者として、ジャンヌ・ダルクが選ばれたのであろうか。高山樗牛の「ジャンヌ、ダルク」には、たとえば坪内善四郎が『仏蘭西史』の中で使用した「忠君愛国」「勤王」といった直接的な言葉は一度も出てこない。しかしながら、高山がジャンヌ・ダルクの伝記と同時期に執筆した論説も併せ読むと、この伝記の中に「一女子」であるジャンヌ・ダルクでさえも勇猛果敢に戦い、国を守る奇蹟を起こしたのであるから、少年読者もまた国の為に力を尽くし戦わなければならない、という作者の考えが込められたとも思えるのである。また、起承転結を明確にした構成、読者への問いかけ、ジャンヌの起こした奇蹟の強調といった特徴を持つ不思議で魅力的な物語は、読者を楽しませると同時に、国を愛し戦う意志を、少年読者の中に自然と引き起こすように工夫され書かれたのではないか。この意味で、『少年世界』の「ジャンヌ、ダルク」では従来のジャンヌ伝よりも巧妙に「忠君愛国」の美德が説かれているのであり、児童雑誌、少年雑誌の中でジャンヌ・ダルク伝は、やはりこの主題と分かちがたく結びついていることが判明するのである。

7 まとめ

本稿では、明治時代中期の児童雑誌、少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記について、それぞれの特徴を検討した。その結果、全体としては次の三点の特徴が判明した。

まず、文章そのもの特徴として、当初は投稿作文であり分量も少なかったが、『少年園』、『少年世界』という少年向けの読み物を重視した教育的、娯楽的要素の強い雑誌において、歴史書に基づく翻訳や、文筆家の創作による作品が発表され、分量の面でも少年向けの読み物として充実していった。

第二に、内容の面では、当初は教科書、教訓書の文章の引用・抜粋から始まり、分量も短いため、個々の出来事は簡潔に記され、物語としての面白みにも欠けていた。しかし、『少年園』では、抄訳ではあるが、ヒューム『イングランド史』の該当部分を比較的忠実に翻訳したため、ジャンヌ・ダルクが王太子に謁見し、オルレアンを解放してシャルル七世を戴冠式へと導くまで、そして、その後の戦いに敗北し、宗教裁判に掛けられ火刑に処されるまでの出来事について、経緯や背景も含め詳細な記述が見られた。さらに高山樗牛の「ジャンヌ、ダルク」では、起承転結が明確になるように物語が再構成され、読者への問いかけ、ジャンヌが「一少女」であることと、彼女の成し遂げた「回天の偉業」との対比が書かれたことで、読みやすさ、読者を惹きつける面白さも増した。

第三に、ジャンヌ・ダルクの美德として、信仰深さ、慈悲が書かれる場合もあったが、「忠君愛国」の精神と、彼女の強さ、勇姿の方が頻繁に描かれた。その背景には、教科書の著者の意識、翻訳の原典の性質など個々に理由はあると考えられる。しかしながら、全体として、男児の読者の割合の方が多初期の児童雑誌、少年雑誌においては、読者の男児を鼓舞するという目的があり、ジャンヌ・ダルクもその目的の中で語られ、強く勇敢な女性として語られたと言えるのではないだろうか。また、坪内善四郎が描いた「忠君愛国」の申し子としてのジャンヌの姿は、明示的に語られることはなくても、ジャンヌ・ダルク伝と分かちがたい主題であり続け、ジャンヌ・ダルク伝を読む少年読者たちは、ジャンヌのような愛国心を持つことを、つねに期待されたのではないだろうか。

1901年には、児童向けジャンヌ・ダルク伝の初めての単行本である中内蝶二『惹安達克』が博文館から上梓され、明治30年代半ば以降には少女雑誌においてもジャンヌ・ダルクの伝記が掲載されていく。その様相についてはまた別稿にて検討したい。

⁵² 高山林次郎「愛国心」『少年世界』、第4巻3号、1898年、17-19頁。

執筆者紹介（掲載順）

田中 智行（たなか ともゆき）	大阪大学大学院言語文化研究科	准教授
中 直一（なか なおいち）	大阪大学	名誉教授
中村 綾乃（なかむら あやの）	大阪大学大学院言語文化研究科	准教授
三浦あゆみ（みうら あゆみ）	大阪大学大学院言語文化研究科	准教授
渡辺貴規子（わたなべ きみこ）	大阪大学大学院言語文化研究科	講師

言語文化共同研究プロジェクト 2020

言語文化の比較と交流 8

2021年 5月31日 発行

編集発行者 大阪大学大学院言語文化研究科